
平成ライダー大戦！？～時空を超える男たち～

レグサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平成ライダー大戦！?? 時空を超える男たち

【Nコード】

N4088X

【作者名】

レグサ

【あらすじ】

クリスマススイブに空から人が降ってきた?!そこから始まる戦い・・・・。無欲ホームレス男にハーフボイルド探偵、リントの言葉が話せない男、ピンボケカメラマン(笑)など平成ライダーが総出演!

12月24日を起点に時が歪み、世界が繋がった・・・。世界は、どうなってしまうのか?ライダーたちはその真相にたどり着けるのか?

ただ今、オーズ・ダブル・ディケイド・電王・ブレイド・龍騎出演

中！

フォーゼも出演予定だぞ！

プロローグ 「とある少女の話」 (前書き)

どうも、レグサです。

平成仮面ライダー大戦！？！時空を超える男たち！の物語は、ライダーたちは原作通りですが、オリキャラが登場します。(オリキャラがライダーになることはありません)

このプロローグには、ライダーは出てきません。

ブローグ 「とある少女の話」

12月24日 17:00 ???

「お父さん、今日はクリスマススイブだよ！」

「うん、そうだね。」

パソコンに向かっていたお父さんが顔を上げる。そうだったか？つて顔している！

「もう、お父さんったら！今日はケーキ買いに行く約束だったでしょ？」

自分から言ったくせに忘れちゃって・・・お父さんがもたもたしたせいで十分も待たされた。

「さあ、行こうか、ユー？」

「うん！」

クリスマススイブの夕方、たくさんの人が街を歩いている。すごい数だ。

「お父さん、ケーキ屋さんまで競争しようよ！」

「えー、絶対ユーが勝つだろ？」

「ヨーイ！どーん！！」

渋るお父さんを見無視して私は走り出した。

飛び出した先にトラックが走っているのを知らずに・・・。

「！！！」

お父さんが届かない手伸ばしながら何か叫んだ。多分、私のことだと思う。

刹那、少女は光に包まれた。

「あ・・・れ？」

気が付くと自分は、立っていた。道路に飛び出したはずなのに道路の手前で止まっていた。

まるで時間が巻き戻ったみたいに

「お父さん？」

道路に飛び出した自分を助けようとしたお父さんがいない。

「お父さん！？お父さんっ！お父さんっ！！」

あのトラックが何もなかったかのように目の前を通り過ぎた。

でも、お父さんはいなくなった・・・。

「どこに行っちゃったの・・・？」

ふと、服のポケットに違和感を感じた。

「あれ？何だろう、これ」

一枚のチラシ、ハートとカリボンがプリントされていて大きな字で『鳴海探偵事務所』と書いてある。

「なるうみたんていじむしょ？」

探偵って、確かシャーロックホームズとかの？と思う。

こんなの一度も見たことがない。でも、持っていた・・・。

「ここに行けって、こと？」

なぜだか誰かが頷いてくれたような気がした。

~~~~~

少女は、走った。

やがて古びた玉屋「かもめビリヤード場」にたどり着いた。

「お父さん……」

少女の小さな唇がきつく結ばれる。彼女は、迷わず二階へと上がっていった。

目指すのは、鳴海探偵事務所

二人で一人の仮面ライダーは知る由もなかった。

この少女の父親探しによって大きな事件に巻き込まれることを……

・

## プロローグ 「とある少女の話」 (後書き)

次回予告！

仮面ライダーのトップバッターは、二人で一人の仮面ライダーだ！

「僕的には・・・当たると爆発！ロシアンルーレットケーキがいいねえ」

「私、聞いてない！覚えてろおおおおおお！」

「はんぶんこじゃねえよ！」

次回 「風の街に揺らめくオーロラ」



## 第一話 「風の街に揺らめくオーロラ」 (前書き)

はい、レグサです。

今回から仮面ライダーたちがバリバリ出てきます！

## 第一話 「風の街に揺らめくオーロラ」

12月24日 19:02 風都風花町

クリスマスイブ

その単語を聞くだけでワクワクするのは、子供だけでなく大人もだろ。

しかし、左翔太郎は複雑な気持ちでその日を迎えていた。

なぜ？

職場でもあるココをキンピカモールやオーナメントで飾り立てるとせつかくのハードボイルドな雰囲気が出ないからである。

飾りをつけているのは、自称浪速の美人所長の鳴海亜樹子だ。

所長だけあって翔太郎は、逆らえない。

亜樹子の飾り付けの様子を見てげんがりしている彼もケーキのカタログを見ている。

彼は、ハードボイルドでなく『ハーフボイルド』なのだ。ここ、試験にです。

~~~~~

12月24日 19:10 風都タワー前

すっかり暗くなった空、街はクリスマスの電飾で輝いている。

「見て！今、空が光らなかった？」

「えー！？もしかして、流れ星？」

一組のカップルが仲良くベンチに腰かけて夜景を楽しんでいる。

どうやら、彼氏のほうが何か空で光ったのを見たらしい

「あ！また・・・」

「どこどこ？」

「あそこに」

「んー？って何アレ！？」

「オ、オーロラだよね？」

「オーロラ・・・ね。間違いなく」

「オーロラってさ、北極とか南極でしか見れないはずだよな・・・」

「うん。なんか不気味ね・・・」

「ああ・・・、せつかくのクリスマスイブなのになあ・・・」

彼らが見たのは、間違いなくオーロラだった。

モノクロのオーロラが遥か遠くで揺らめいていた・・・まるで何かを誘うように

~~~~~

12月24日 19:30 風都風花町

「だ〜か〜ら〜！このスペシャル生クリーム地獄 クリスマスケーキにする！」

「いんや、このハードボイルドなスイートチョコDEパライスクリスマスケーキだろ！」

「僕的には・・・当たると爆発！ロシアンルーレットケーキがいいねえ」

翔太郎は、クリスマスケーキを何にするかを亜樹子と相棒のフィリップとでもめていた。

「大体、ハードボイルドって言うけど・・・ただ、チョコケーキが食べただけでしょ!？」

「なにい!？お前こそ選んだケーキの生クリーム地獄ってなんだよ!？どんなケーキだよ、それ!？」

「生クリームでできたケーキ」

「ケーキじゃないだろ!！」

「ケーキだもん」

「そんなにもめるなら、間を取るつもりで僕のにしないかい？」

「爆発したくないから、いや」

二人が拒否する。

「死ぬ威力じゃないから、痛いだけだよ？」

「そこかい!！」

二人が仲良くつつこんむ。

「とりあえず、フィリップのを却下するのはいいか？」

「許す」

「亜樹子ちゃん!？そ、そんな・・・」

フィリップはケーキを却下され、ベットでふて寝し始める。

「で、俺に譲る気はないのか？」

「そつくりセリフ、そのまま返すわ!」

両者の目から火花が散っているように見えるのは、気のせいだろうか？

「ん？今、ノックが聞こえたような・・・？」

「はっ!お客さん!？」

小さなノックの音に気が付いた翔太郎、亜樹子が急いで扉を開けると・・・

「あ、あの・・・『なるうみたんていじむしょ』ですか？」

長い髪と大きな瞳がかわいい少女が立っていた。

「え？そ、そうですよ・・・」

鳴海を『なるうみ』と読まれ、戸惑った亜樹子は訂正するのを忘れてしまった。

「依頼つて、できますか？」

「もちろん！愛犬の搜索などなんでも！あっ！座りますか？」

「は、はい」

少女から見たら大の大人に敬語を使われて、少女も固くなってしまっている。

「依頼はなんでしょうか？」

と翔太郎は、問う。

「えつと・・・、私のお父さんを探してほしいんです」

「お父さんを？」

「はい・・・。今日の夕方に一緒にケーキ買いに行こうって、出かけて・・・」

「はぐれただけってないよな、お嬢さん？」

「絶対、そんなことない！お父さんは、いつでも私の傍にいてくれたのよ！」

翔太郎の問いを少女が声を荒げて、否定する。心なし目が潤んでいる、今にも泣きそうだ。

「翔太郎くん・・・」

隣の亜樹子が目で謝れと言っている。

「ご、ごめんよ・・・。」

「それで、ケーキ買いに行く途中でお父さんがいなくなっちゃったの？」

「突然、消えちゃった・・・」

「消えたって、パツて感じにかな？」

少女が頷く

「・・・・・・・・・・」

それを聞いて翔太郎の顔が陰くなる。

最近、妙な失踪事件が多いと照井が言っていた。どの事件も人が蒸発したようにいなくなっている。

その事件は、発生することの नाही ず『オーロラ』が目撃されているとのこと、その超常現象から照井はドーパントのせんが強いと言っていた。

「人探しをするときは、情報がある。そのためにお嬢さんに色々質問してもいいか？」

少女が頷く

「お父さんの名前は？」

みきたてつろう  
「樹田哲郎」

という感じで、翔太郎は人探しに必要なことを少女から聞いていった。

「オーロラって見なかったか？」

「オーロラ・・・ですか？」

突然、父親探しに関係ないようなことを聞かれ眉を寄せる少女。

「オーロラは、見なかったけど・・・」

「けど？」

「何か光っていた気がするの」

「そうか。じゃあ、お嬢さんのお父さんを探してくる。それと・・・亜樹子、フィリップ起こしておいてくれよ？」

「えっ！？翔太郎くんがやって・・・よ？」

反論する亜樹子だが、翔太郎はもう外へ出て行ってしまっていた。

「私、聞いてない！覚えてろおおおおお！」

その後、亜樹子の声は街全体を震わせと謎の雄叫びとして伝説になったとか、ならなかったとか

~~~~~

「と、いうことだ。ウォッチャマン、何かそれについての情報はあるか？」

「もちろんだよ、翔ちゃん！」

情報屋のウォッチャマンに街に現れるオーロラの情報をもらいに来た翔太郎

「最近、それに関する掲示板が増えているんだけど、特にこの『風都の新 都伝』っていうのがいい情報が載っているよ」

「『風都の新 都伝』が掲示板の名前か？」

「そうそう、元々は都市伝説について語る場所だったんだよ。しかもその掲示板、実際に失踪した人が書き込んでいたらしいよ」

「ふうん、分かった。ありがとな」

翔太郎は、ウォッチャマンに封筒を渡す。

どーもと言いつつ中身を確認したウォッチャマンは、笑顔で去って行った。

「えーっと、『風都の新 都伝』と・・・」

スタックフォンを使って掲示板を見始めた翔太郎、すぐにオーロラに関する物を見つけた。

以下、『風都の新 都伝』より抜粋

「最近、オーロラが風都の空に現れるって本当ですか？」

「その話知ってる！そのオーロラ灰色なんだって！」

「本当、自分みたつていう人知ってるよ」

「みてみたいなあ、どこでみたか教えてください（＾＾）」

「やめたほうがいいよ？見たら消えちゃうらしいぜ」

「ええー（。。。）マジで!？」

「その人、次の日から学校来なくなった」

「見た奴が全員消えるってわけじゃない。手紙もらづらい、消える前に」

「『招待状　様　ゴシヨウタイイタシマス』って内容らしい」

「なんでそんなに詳しいの（。。。）ヤバイ」

「ウソだろ？顔見えないからって勝手なこと書くな」

「ホントだよ」

「灰色のオーロラは、招待状を持った人間を異次元に連れ去る」

「『招待状』か・・・」

翔太郎は、一度探偵事務所に戻ることにした。

少女が父親のことをどこまで知っているかわからないが、『招待状』を受け取ったかどうか聞いてみる価値はありそうだな、と考えたからだ。

「それにしても、風がないな」

風都は夜でも風が吹く。しかし、道端の風車かざぐるまから風都タワーの風車ふうしゃまでその動きを止めている。

風都に何か起こっているのか・・・？という疑問が翔太郎の頭をよぎったのであった。

~~~~~



「お父さんの手紙？」

「ああ、前日とかに手紙を受け取っていなかったか？」

「……あ！もらってましたよ。このくらいの細い封筒に入ってた」

少女の仕草からよくある封筒より細長いものであることが分かった。

「でも、その封筒……真っ白だった」

「真っ白？」

「封筒に切手も住所も書いてなかった」

「そうか……」

「翔太郎くん？」

少女から父親が『招待状』のような奇妙な手紙を受け取っていたことを聞き出した翔太郎に亜樹子が笑顔で呼びかけてきた。

「あ、フィリップ起こしてくれたか？」

「もつちろーん」

と言いながら笑顔で一回転する亜樹子

「フィリップ、検索頼むぜ！」

「ああ、もちろん」

ベットに座っていたフィリップが立ち上がり両手を広げる。

フィリップの周りの空気が変わる、地球の本棚<sup>ほし</sup>に入ったようだ。

「『灰色のオーロラ』『招待状』『異次元』だ」

「キーワードは、『aurora of gray（灰色のオーロラ）』、『invitation card（招待状）』、『another dimension（異次元）』」

フィリップの目の前にあった膨大な数の本が消えてゆく

手元に残ったのは『masked riders（仮面ライダーたち）』という本のみだった。

「あったか？」

「あったけど……。翔太郎、鍵がかかっているみたいだ」

本を開こうにも蝶番でしつかりと閉じられている・・・

「はあ！？『鍵』がいるのか？」

「この場合の『鍵』は、何かきっかけがいるみたいだね」

「お父さん・・・」

翔太郎は、せつかくの手掛かりが水の泡同前になったことより、少女が悲しそうにうつむくを見るほうがつらいと感じた。

~~~~~

「・・・・・・・・」

傍らにハードタービュラーを止めて風都タワーから街を見回す翔太郎、こうなれば灰色のオーロラを見つけてやる！と事務所を飛び出したのだ。

「翔太郎、焦る気持ちはわかる。でも、今日はオーロラが現れないっていう可能性もあるからね？」

「・・・・・・・・」

『確かに。現れるって可能性もあるってことだね』

ベルトの装着によりフリリップと意思疎通ができる。

無線やケータイよりも便利だがお互いに何を考え、思っているかが筒抜けということが欠点だ。

「来るなら来いよ、オーロラー！」

何を思ったのか、突然叫ぶ翔太郎

その声が天に通じたのか、街のはずれのほうにオーロラがゆっくり

と降り始めていた。

『日本の神様は、八百人いるっていうけど・・・まさかねえ』

「はっ！そんなの一人でも聞いてくれたらいいぜ！フィリップ、変身だ！」

『cyclone』『joker』

「変身！」

『cyclone』『joker』

すさまじい風と共に翔太郎は、風都を守る戦士　　ダブルに変身

した

「行くぜ」

『翔太郎、急いだほうがいい。すぐに消えてしまつかもしれないよ』

「わかってら！」

タービュラーに乗ったダブルは、クリスマスイブの風都の空を飛んでいく。

途中で赤い服を着て、トナカイにそりをひかせているおっさんを見たような気がしたが、それを気にしているところではない。

丁度、オーロラの真下に来る。

それにしてもでかいな・・・と翔太郎が思っていると

『ん？オーロラから何か・・・』

サイクロンサイドのフィリップがタービュラーの方向を変える。

そして、ダブルは見た。

赤いドーパント？と落ちていく人を

「やっぱりドーパントの仕業だったか！」

『まずは、落ちている人を助けないと翔太郎？』

「ああ、フィリップ」

『間に合いそうもないから、ルナメモリの力を使おう』

『luna』

『luna,joker』

ルナジョーカーになつたダブルの片腕が伸びる、あとちょっとが届かない

「届けえ！」

翔太郎の気合の声とともに足に手が届いた

「セーフ」

『翔太郎、もう一人いるよ！』

「どこだ！？」

少し離れた上空に人影が見える

『どうする、翔太郎！？』

「迷つてゐるひまはねえ！このまま・・・！」

人の足をもつたまま、腕をさらに伸ばす。

器用にも落ちてゐる人に腕を巻きつける、もちろん手には足を持つたまま

「間一髪だぜ・・・」

『翔太郎、バランスが崩れて僕たちも落ちてゐるけど』

右側に人二人分余計に重たくなつてゐるため、タービュラーが傾いてしまつてゐる。

「お、落ちる！？」

「おい」

「ちょ、ちよつと待つてくれ！今、落ちてんだよ・・・つて！？」

いつの間にかタービュラーの左翼にガラの悪そうな男が立つてゐる。

「馬鹿を助けた礼だ。これでましになるだろ、はんぶんこ？」

男の言う通り、傾きがましになった。

てこの原理のおかげでなんとかなつたようだ。てこの原理、ここ試験に出ます。

「誰だか知らねえけど・・・助かつた・・・」

『……（翔太郎、この男。怪しいよ）』

「（確かに……、どこから湧いてきた？）」

怪しがる二人をよそに男は、反対側の宙ぶらりんの人に怒鳴る。

「おい！起きろ、馬鹿！」

「あ、あれ……ここは……」

男の声に足だけつかまれて宙ぶらりんになっている青年が意識を取り戻したようだ。

「俺、助けてもらったの？ありがとう、はんぶんこさん……」

頭に血が上っているのか、声が小さい。

「はんぶんこじゃねえよ！」

『僕たちは、二人で一人の仮面ライダー……』

「『ダブル』だ！」

「『仮面ライダーダブル？』」

謎の男と青年が首をかしげる。

今だ落ちてきたもう一人は目を覚まさず……。

第一話 「風の街に揺らめくオーロラ」 (後書き)

次回予告！

空から落ちてきた青年たち、彼らはいったい何者なのか！？

「なんで空から落ちてきたんだ？」

「特別な日ってこと」

「・・・お前、なんか企んでるだろ？」

ラストで登場したはずの誰かさんは空気になっているぞ！

次回 「〇の回想ノベルトを無くしたライダー」

第二話 「Oの回想／ベルトを無くしたライダー」 (前書き)

どうも、レグサです。

今回の話は、無欲ホームレス男と赤い鳥が中心です。

第二話 「Oの回想／ベルトを無くしたライダー」

12月24日 22:45 風都風花町

クリスマスイブにやって来た少女は、突然消えた父親を探して欲しいと依頼してきた。

彼女の父親は、奇妙な手紙 『招待状』を受け取っていた可能性がある。

『招待状』を受け取った人間は、『灰色のオーロラ』によって別の世界に送られてしまう・・・らしい。

別の世界に送られるかどうかは、確かめるすべがないので真偽は不明。

しかし、『招待状』と『灰色のオーロラ』は、関係があるようだ。

そして、俺たちは『灰色のオーロラ』の確認に成功した・・・が、人が二人も落ちて来たのであった。

赤いドーパントらしいものも確認したが、人命救助が優先。もちろん、ドーパントを見失った。

「一体何がどうなってんだよ・・・」

とりあえず、事務所に戻ってきた翔太郎は頭を抱えてつぶやく

「俺が聞きたい」

落下から助けてくれたガラの悪い男・・・怪しい・・・

「ここは、どこなんですか？」

翔太郎たちが助けた二人のうち、ガラの悪い男の知り合いと思われる青年が問う

もう一人は、完全に気絶しているのでベットに寝かせている。

「ここは、風都。心地よい風が吹く街さ」

「風都・・・？」

青年は、そんなところあつたつけなという顔をしている。

「で、名前は？」

「あ！俺、火野映司つていいいます。えーっと、こっちがアंक」

「俺は、左翔太郎。相棒のフィリップと探偵をしている」

「私、鳴海亜樹子。ここの所長よ！」

自己紹介をする青年 映司

「本当、助かりました。ありがとうございます。」

「いえいえ、当たり前のことですよ」

「亜樹子、お前何にもしてないだろーが」

「だまらっしゃい！」

翔太郎の頭を亜樹子がスリッパでたたいている、フィリップは二人を無視して気になっていたことを映司に聞いてみることにした。

「君は、どうして空から落ちてきたのかい？」

「えーっとそれは・・・」

~~~~~

12月24日      21:50      夢見町クスクシエ

クリスマスイブということで夕方から賑わっていた店も閑散として  
いる。

「はー、映司くん。お疲れ」

「お疲れ様です、知世子さん」

「すごく疲れちゃったみたい・・・肩が重たいわ」

「昼間に踊りすぎたんですよ」

「うん、あれはちよつとやりすぎちゃったわね」

店長の知世子は、昼間にサンタのコスプレしてサンバを踊っていたのだ。

なぜ、クリスマスイブなのにサンバを踊った？とは、つつこんでいない。

「俺、片づけ全部やりますよ？」

「えっ！？いいの？」

「はい」

「じゃあ・・・あれをしまつて・・・これをだして・・・」  
店の細かい装飾の変更や仕込みの有無を伝えて知世子は店を後にした。

「じゃあ、お休み」

「お休みなさい」

知世子を見送った映司は、厨房をあらかた片づけると冷蔵庫を開け、中にある両手に乗るくらいの箱を取り出し二階へ上がる。

「アंक、入るぞー」

「・・・」

部屋の片隅に置かれたソファの上に大きな赤い鳥が寝転がっている。くつろいでいるわけでなくだるそうに己の翼をいじくっている。

「アंक、今日はクリスマスイブだね！」

小さな箱を持ちながらテーブルを部屋の隅からアंकの前まで引き寄せる。

「それが？」

「特別な日ってこと」

「お前ら人間のだろーが」

アंकの文句をスルーして映司はテーブルの上に箱を丁寧に置いた。  
「特別な日だからアレも特別にしてみたんだけど・・・」

映司は、なぜか笑いながら箱のふたを開ける。

「・・・これって、鴻上の奴が作っていたのだろ？」

「うーん、ちょっと違うかな？」

箱の中から小さなケーキが出てきたのだ。それを訝しげに見るアंक

ク。

「はい、アंक」

「食えってか？」

映司がアंकにスプーンを差し出す。

「これを見ていると鴻上の奴を思い出す・・・」

「まあ、そんなこと言わずに」

「・・・、お前何か企んでるだろ？」

「えっ？そんなことないけど」

「顔に書いてあるぞ」

先ほどから映司が笑顔なのだ。笑顔といえいいがニヤニヤしているといった方がいいだろう。

「これ、実は比奈ちゃんが作ってくれたんだ・・・アंकのために」

笑っていた顔から一遍して真剣な顔になる映司

「本当は比奈ちゃんが作ったことはアंकが食べてから言おうと思っただけなんだ」

「といいつつ、アंकにスプーンを押し付ける。

「だから、アंकはちゃんと食べないと・・・比奈ちゃんに『ふんにゅ』されるぞ」

「なっ!?!?・・・た、食べるとするか・・・」

比奈の『ふんにゅ』に脅されて渋々食べることにしたアंक、人間態となりケーキと対峙する。

「そうでなくっちゃ、ね？」

笑顔に戻った映司に見守られつつ、ケーキを一口・・・

「冷たい・・・？」

「でしょ！それ、アイスクリームって言って、アイスでできているんだよ」

「先に言えよ」

と文句を言いつつケーキを食べ始めるアंक。

「さてと、片づけの続きをしなきゃね！アंक、明日比奈ちゃんに  
お礼言えよ？」  
「考えておく」

~~~~~

「これで片付けはいいかな？」
門の外に出て飾りつけをチェックするが片づけといっても看板をし
まうだけの簡単なお仕事なのだ。

「火野映司様ですか？」

背後から声をかけられ振り向くと郵便屋さんが立っている。
制服に帽子、黒い革靴に自転車という一昔前の郵便屋さんであった。

「あ、はい」

「お届け物です」

「どうも・・・」

切手も住所も書いてない、細長い白い封筒を受け取った。

「あの・・・」

「って、居ない・・・？」

目を離したのはほんの一瞬だったのに、郵便屋さんはすでにいなく
なっていた。

夜の闇から微かに錆びた自転車のこぐ音が聞こえるだけ・・・
「・・・・・・・・」

何かおかしいと思いつつ二階に戻る。

「なんだ？手紙か？」

すでにケーキを食べ終わったアंकが問う。

「うん、不思議な郵便屋さんにもらった・・・」
引き出しからカッターを取り出すと封筒の封を切る。

「『火野映司様　ゴシヨウタイイタシマス』？招待状かな・・・？」

「映司、なんか来るぞ！」

何かを察知した天井を睨むアंक

そして、天井から揺らめく何かが迫ってきて・・・いきなり空に
投げ出された

~~~~~

「その揺らめく何かが『オーロラ』だ。実に興味深い・・・」

「そういえばアंकくんって、外国の人？珍しい名前だね」

翔太郎をスリッパで叩いていた亜樹子が問う。

「そ、そう！外国生まれなんだよな、アंक？」

いきなり映司が慌て出す。

「ふん・・・」

「そういえば、お前空から降ってきたはずなのに平気なんだよ？」

「俺は、にんげ「わああああ！」」

アंकの言葉に映司が割り込む

「いいだろ。ホントのことって減るもんじゃないだろ」

「（まずいつて、いきなり人間じゃありませんだなんて・・・！）」

「（怪しい・・・）」

小声で注意する映司の様子を見て翔太郎はさらに不審がる。

「（おい、フィリップ。あいつがドーパントである可能性は？）」

「（十分にあるよ。大体、あの時タービュラーは傾いて凡人が生身で立つてられる状態じゃない……。ガイアメモリの副作用で肉体強化されているのかもしれないね）」

「（火野っていう奴は、共犯者かもしれないな……。）」

「（まあ、あくまで仮説だよ。そこんところわかってるよね、翔太郎？）」

「（ああ……。）」

「なんかこそこそ話してるわ……。）」

なんだか仲間はずれな亜樹子は、ふとあることに気が付く。

「あれ？ユーちゃん？」

依頼人の姿が見当たらず、彼女が座っていたところにメモがある。

『家に帰るので、何かわかったら連絡してください。0901……。』

『

電話番号と思われる数字が書いてあった。

「そっいえば……。映司、お前ベルトは？」

「え？あれっ!？」

空から落ちたりと色々あったのですっかり忘れていた映司

ポケットの中を探るがパンツと小銭しか出てこない

「無くしたとは、言わないだろうな？」

「えへへ……。無くしました。」

照れ笑いする映司

「探しに行つて来い!」

「は、はい……。）」

「どうした？」

「俺、大切なもの無くしちゃったみたいで」

「……一緒に探してやろうか？お前、この街のことを知らないだろ」

何か少し考えて翔太郎が映司に提案する。

「すごく助かります」

~~~~~

12月24日 23:59 風都風花町

こうして、謎の一日が終わりを告げた。

第二話 「Oの回想／ベルトを無くしたライダー」（後書き）

次回予告！ 第三話 「ウサギと列車と鬼」
オリジナルキャラのユーちゃんが主役だ！

『ねえ、僕と契約してくれないかな？』

「イマジンの臭いがしたと思ったら・・・誰だ！てめえ！」

「はい、どうやってパスを手に入れたか知りませんが・・・よほどのことがない限り許可しましょう」

不思議な列車に乗っている赤い鬼が登場しますよ。

第三話 「兎と電車と鬼」(前書き)

はい、レグサです。

今回は、ユーがメインで、題名の通りあの人達がでてきますよ。

第三話 「兎と電車と鬼」

12月24日 23:07 ???

「お父さん・・・」

独りで夜道を歩いて帰ってきたユ一、家についても彼女の父親はいなかった。

「・・・・・・」

ユ一は今、父親の部屋にいる。乱雑に置かれた書類、何台ものパソコン、何かの装置・・・小さな研究所のような部屋。

「お父さん、ケータイ置いて行っちゃったのかなあ・・・」
何度も電話をかけても一向につながらないのだ。

ふと、一台のパソコンがユ一の視界に入る。

画面に表示されている何かの設計図と数式ではなく、キーボードの下に何か挟まっているのが目に留まった。

「なんだろう？」

そういえば・・・今日の朝、父親がこのパソコンを使っていたことを思い出しながら挟まっている何かを引っ張り出す。

「パスケース？なんでこんなものが・・・？」

出てきたのは黒いパスケース表面にTのような模様が描かれている。

『それは、ライダーパスっていうんだよ』

ユ一以外誰もいないはずの部屋に声が響く。

「だ、誰！？」

『僕は僕であつて。それでしかない。』

「・・・・・・？」

姿なき声が少し寂しそうに言う

『Wow！ライダーパスを持っている子に会えるなんて！君は、特

異点なのかい？」

「らいだーぱす？とくいてん？何、それ・・・？」

「何にも知らない？」

「ていうか、できなさいよ！」

相手が害がないのがわかると少し強気になるユー

「うーん、出てきたいのは山々だけど・・・こんな姿見せられないよ」

「どういう意味？」

「僕が僕じゃないから」

スツと光を放つものが現れる。

「ひ、人魂！？あなたお化け！？」

「お化けじゃないよ。」

「じゃあ、何？」

「I don't know・・・僕はなんだろう？」

「・・・」

目の前の人魂は、頼りなさげに揺れている。息を吹けば飛んでいきそうだ。

「ねえ、僕と契約してくれないかな？」

「はっ！まさか・・・」僕と契約して魔法少女になってよ？」ってこと！？」

ユーの脳裏に某魔法少女のアニメのワンシーンが流れる。

白い猫のような生物が少女たちと契約するあのシーンが・・・。

「いや、それは違うから・・・。契約の条件は、君の願いを一つ叶える為に力を貸してあげる代わりに僕に姿をあげるってところかな」

「お願いを叶えてくれるの・・・？」

「僕は、魔法使いとかそんなじゃないよ。But、でも、力を貸してあげる・・・君の願いを叶えてあげるために」

「じゃ、じゃあ・・・私のお父さんを探すのを手伝ってくれる？」

『君がそれでいいならOK。僕は、そのために力を貸してあげるよ』
「契約する」

ユーの瞳が真直ぐ人魂を見つめる。

『Yes、それがいいね。でも、途中で契約を破棄するのは無しだよ？お願いを変えるのもダメ・・・それでもいいかな？』

「うん！」

『じゃあ、契約完了！僕は、君から姿を貰うでしょう』

嬉しそうに人魂が宙を舞うとユーの中に入り込んだと思ったたら服の間から砂がこぼれる。

「え！？ちよつと！何やってるの！？」

『お？やっぱり、特異点だったのか。』

声の主は何かに納得したようだ。

「ちよつと、話を聞いているの！？」

『Sorry・・・今から出るから』

淡い光を放つ何かがユーから飛び出し、みるみる形をとっていく。

「How do you do、お嬢さん？つてところかな」

「う、うさぎ！？」

目の前に現れたのは、ピンクの燕尾服を着た青い瞳のピンクのウサギ？が立っていた。

「君のイメージしたものの姿を貰ったけど・・・なかなかいいねえ」

「私のイメージ・・・？」

「That's right！君は、『Alice in wonderland』のウサギをイメージしてくれたんだ。」

「ありすいんわんだーらんど？」

「不思議の国のアリス、さ」

おもむろにウサギが壁にかかっている時計を見る。

「いけない・・・時間だよ、アリス！『時の列車』に乗ろう！Hurry up！！」

「え？」

「急げ！急げ！」

慌て出すウサギは、ユーを小脇に抱える。

「きゃあ！何するのよ！」

「You don't angry, please? 乗り遅れちゃうからね」

「英語、解んないし！」

ユーが今更なことを叫ぶが、構わずウサギは部屋のドアを開ける。
そこには……

「十一時十一分十一秒……間に合ったね」

「な、なんで……電車が？」

見たこともない形の電車らしいものが止まっていた。

「誰が乗ってるかな」

「これに乗るの？」

「Yes！」

ウサギは乗り込むとユーを下してあげる。

「でも、切符もってないよ」

「この電車の乗車券は、そのライダーパスの中にある」

「この中に？」

そんなことを話している間に扉が閉まり、ゆっくりと動き出す。

「きれい……」

あたりが光ったかと思うと不思議な空と砂漠のような光景が広がる
ところに電車が出る。

「イメージの臭いがしたと思ったら……誰だ！てめえ！」

突然、車両から赤い鬼が出てくる。

「臭いって、ひどいなあ。君こそ誰？」

ウサギと鬼が対峙する。

「（あわわわ・・・、無断で乗っちゃ駄目だったんだよ）」

ウサギの後ろに隠れて小声で言う、ユー。

「（Don't be afraid、心配しないで・・・）名前を聞くなりまず、そっちから名乗りな？」

「けっ！オレはモモタロス！」

モモタロスと名乗った鬼は、ぶっきらぼうに答える。

「僕の名前か・・・（僕の名前、君が決めてくれない？）」

「（えっ！？名前、無いの？）」

「（Yes）」

「（え、えーっと・・・クリス、とか？）」

「（Great!）僕はクリス。この子の契約者」

「あ？契約済みなのかよ・・・何が狙いだ？」

「モモタロス！何してんのよ！」

モモタロスがやって来た車両から同い年ぐらいの女の子が飛び出してきた。

「おう、ハナクソ女！変なブベラッ」

モモタロスが宙を舞い、横に三回転したところで地面に落ちた。

もちろん、飛び出してきた少女の手によって・・・

「Wow・・・」

「う、うわぁ・・・」

さすがに凍りつく二人

「あれ？あなた達は・・・？」

~~~~~

「それでは、父親を探すためにやってきたのですね？」

目の前の「デンライナーのオーナー」と名乗る、中年の男性が二人に問う。

「はい……」

「ちよつと、チケットを拝見……」

「？」

「（ライダーパスの中のカードを出して……）」  
戸惑うユーにクリスが助言してくれる。

「えーつと、これですか？」

「いかにも、拝見しますよ。おや……これは……」  
オーナーが眉をひそめる

「どうしたんですか、オーナー？」

モモタロスに鉄拳制裁していたハナと名乗る少女が問う。

「いえ、なんでもありません。これはお返ししよう。」

「あ、あの……私たちこの列車に乗っててもいいんですか？」

「はい、どうやってパスを手に入れたか知りませんが……よほどのことがない限り許可しましょう」

「よかったね、ユーちゃん」

「ありがとう、ハナちゃん」

「んー、女の子同士は仲良くなるのが早い！」

すっかり仲良くなった二人を見てクリスが呟く

「ねえ！ウサギさんはコーヒー好き？」

「コーヒーか……。どちらかと言えば紅茶だけど飲むよ？」

「このコーヒーすごくおいしんだよ！」

「Oh！それは是非飲んでみたいね」

リュウタロスが無邪気にクリスに話しかけている。

そんな光景を見てウラタロスがモモタロスに言う。

「センパイ、あのイマジンちゃっかり居座っちゃってるね」

「たれ耳！」

「僕の名前はクリスだけど・・・何？赤鬼君」

「鬼じゃあねえよ！俺の名前はモモタロスだ！あー！！また、変なのが増えやがった！」

「What!？変なのとはひどい、君の方がよっぽど変だ」

「確かに」

ウラタロスが笑う

「何をー！！」

二人の間に一触即発な雰囲気が始めたとき

「ただいま」

仮面ライダーは帰ってきた。



### 第三話 「兎と電車と鬼」(後書き)

Open your eyes for the next  
s . . .

「．．．．怪しさ満点!!」

「言いたいのはそれだけですか？」

突如、現れた謎の男たち．．

『化物物．．．？我々はオルフェノク、人類の進化した形態なの  
です!』

ドーパントとは全く違う異形 敵？

「俺が変身する!!!」

次回、第四話「Kのベルトノ落し物はどこにある？」

第四話 「Kのベルトノ落し物はどこにある?」 (前書き)

はい、レグサです。

Kのベルトの『K』ってなんだ?と思う方!  
それは読めばわかります。

#### 第四話 「Kのベルト／落し物はどこにある？」

12月25日 08:45 風都風花町

12月24日、クリスマスイブにオーロラが空に現れ、そこから人が降ってきた。

奇妙な郵便屋から『招待状』を受け取った火野映司と名乗る青年とアंकという金髪の男。

そして、今だ目を覚まさない青年……。

後でわかったことだが知り合いらしいガラの悪い男と『夢見町』にいたらしいのだが……フィリップに検索させても何も引つかからなかった。

すなわち、『存在しない』町から彼らは来たということになる。

彼らの話が本当ならば、だが……どうもガラの悪い男 アंकが怪しい。

『灰色のオーロラ』の犯人かもしれないので彼らを見張ることにした。

まあ、あくまでも可能性の話なんだが……

~~~~~

「おはようございます、左さん」

翔太郎が机の前で物思いにふけっているとガレージの方から映司がやって来た。

「おはよう」

「昨日は布団とかありがとうございました。迷惑ばかりかけちゃって・・・」

昨日の夜、とりあえず無くしものを探すのは明日にしようということにしてガレージの方で寝てもらったのだ。

「あれ？あのアンクって奴は？」

「ああ、なんか起きたらもういなくて・・・。あつ！アイツのことなんで心配しなくても大丈夫です。」

別の意味で心配なんだけどなあ・・・と思う翔太郎。

「あの・・・昨日俺達が落ちてきたあたりにあるかもしれないんですけど」

「ああ、そこからあたってみるか。ついでに調べたいこともあるかな」

徒歩で行くこと数十分・・・

街はずれの廃工場までやって来た。丁度、このあたりの上空から彼らが落ちてきたということになる。

「ここらへんなんだが・・・」

「・・・・・・・・・・」

すでに映司はそこら辺をのぞいたり、ひっくり返し始めていた。

「どうだ？」

「ここにはなさそうですね……。」

と言いつつも、まだそこら辺を探し回っている。

余談であるが、無くしものを探すとき、見つけるまでと気が済まないと感じる人はいるだろうか？

それは性格云々の話でなく、人間の『搜索本能』だから、だそうだが、つまり、『物を探し出す』という本能に突き動かされているために、そう感じるのだ。

「……。」

映司の視線が廃工場の焼却炉に向いている。

かなりの大きさで一時にたくさんものを焼却していたのだろう。工場が廃棄されることになってから中の焼却物が放置され、錆びつき、腐食され、気味の悪い洞窟のようになっていて。

「まさか……、あの中行くつもりか？」

「いや、なんか……。違和感がする、ような……。」

「違和感……？」

「やっぱ、何でもないです。気にしないでください。」

「あ、ああ」

また、映司は探し始めたが、翔太郎は焼却炉の中が気になっていた。何を思ったのか焼却炉の中を覗き込む翔太郎

「!？」

焼却炉の廃材の隙間から入らないはずのものが目に入る。白い灰を被った……帽子、黒いコート、ズボン。まるでそこに人がいたようにきれいに置かれている。

近くに落ちていたカバンから持ち主のものらしき手帳やペットボトルが転がっている。

手を入れて手帳を引つ張り出すとそこに名前が書かれていた。

「西藤四郎!？」

白い灰が服に着くのも構わずに自分の手帳を出す。

照井から『灰色のオーロラ』で失踪した人間の名前を聞いていたが・
・

『西藤四郎 帽子に黒いコートを着用』

間違いなく灰まみれの服は、西藤四郎のものである……。

しかし、彼はどこに行った？

まるで灰が人だったように感じた翔太郎は、思わず後ずさる。

「貴方は、ここで何しているのですか？」

いつの間にか翔太郎の背後に白いロングコートを着たオールバックの男とどこにでもいそうなサラリーマンが立っている。

「……怪しさ満点!!」

「言いたいのはそれだけですか？」

「つつこまないのかよ……!!……何者だ？」

「貴方に名乗る名前は持っておりません。貴方は、警察の方ですか？」

「警察！？俺は、左正太郎。探偵だ！」

「これは、名前までご丁寧に……。」

ロングコートの男が指パツチンをするとサラリーマンが翔太郎の前に立ちはだかる。

「？」

「この男を処分しなさい」

白いコートの男が先ほどと変わらぬ口調で部下らしいサラリーマンに告げる。

「はっ」

「あっ！待て！」

廃工場の奥へと向かいはじめた男、翔太郎が追いかけようとするとサラリーマンが行く手を阻む。

「お前ら、何をしたんだ！？」

「あなたには知らなくていいことなのです」

翔太郎とサラリーマンが対峙する。

「あれ？左さん、何やってるんだろう？」

丁度、サラリーマンの背後からやって来た映司だが、二人とも映司には気が付いていないようである。

「この『カイザ』の力……使わせていただきますっ！」
「ベルト……？ドライバーか？」

サラリーマンが何やら金属製のベルトを腰に装着し、見たこともない携帯電話を取り出す。

携帯電話を操作したかと思うと

『S t a n d y i n g b y . . . 』

「変身！」

『C o m p l e t e 』

電子音と掛け声とともに彼の体に光るラインが駆け巡り黄色に光るラインを纏った黒い戦士が現れた。その顔は、『X』すなわちギリシャ文字の『カイ』を模しているようだ。

「変身だ、フィリップー！」

身の危険を感じた翔太郎がすでにダブルドライバーを装着し、メモリを構えている。

『了解だ、翔太郎』

『J o k e r 』

「変身！」

『C y c i n e , j o k e r 』

すさまじい風と共にダブルが現れ、カイザと対峙する。

カイザというと、ミッションメモリーを引き抜き、ベルトについている『X』を模した形状のブレイガンに挿入、ラインと同じ輝きの刃を出現させた。

「それがこの街で有名な仮面ライダーダブル・・・ですか」

静かにカイザが逆手にブレイガンブレードモードを構える。

『これは、初めて見るドーパントだ』

「初めてとかそんなこと関係ねえ。リーチがある奴にはこれだな！」
ダブルが灰色のメモリを取り出すが

『B u r s t m o d e 』

「はっ！」

カイザが何かさせまいとブレイガンから光弾を放つ、それを素早く

側転で避けるダブル。

「ちっ！剣かと思ったら銃にもなるのかよ」

『翔太郎、ルナのメモリも使いたまえ。柔軟に対応しようじゃないか？それにしても、実に興味深い……。』

「わかつてら！」

『Runa, metale』

緑と黒から黄と灰色に変化し、背中に現れたメタルシャフトを構える。

「来な！」

「いわれずとも！」

距離があつた両者の間合いが一気に縮まり、シャフトとブレイガンが激しくぶつかる。

「……………」

「……………」

押し合う二人、このままこう着状態になるのかと思えばダブルのルナサイドからカイザにキックがみまわれる。

「ぐっ！」

ボディにキックを受け、錆びついた柱に叩きつけられたカイザが呻く。

『ボディーがガラ空きだったからね。君が何者かわからないけどこちらも本気で行こう。翔太郎？』

「ああ！」

押し合つた際に相手があまり戦闘に慣れていないと思つたダブル。一気に畳み掛けることにしたが

「やはり、私にはこれは使いこなせないようです……………」

突然、相手が変身を解く

「あ？」

あまりのことに拍子抜けするダブル、だが男の顔に怪しい模様が浮かび上がるのを見た。

ベルトを投げ捨てた彼が灰色の異形へと変身したではないか！

その姿は、異形でありながら上半身は羽を模した鱗のようなもので覆われ、顔にするどい嘴があり、どこことなく鷲を彷彿とさせるものだ。

『こちらの方が身が軽い!』

「どうなつてんだよ、フリリップ」

『わからない……。でも、言えるのは』

鷲の異形が襲い掛かってくる。さっきの姿とは比べ物にならないほど速い!

『ドーパントではない』

「マジで化け物か!？」

『化け物……。？我々はオルフェノク、人類の進化した形態なのです!』

オルフェノクと名乗った異形は、言葉を発するたび、その影に上半身のみの人間が写っている。

彼の素早い動きに翻弄され始めるダブル。無論、サイクロンジョーカーになればいいのだが、その暇さえない。

鷲のオルフェノク……。イーグルオルフェノクは鋭い刃の爪が付いた足で回し蹴りを繰り返す。

「シャッ!」

「くっ……。!この野郎!」

ダブルがメタルサイドからパンチを浴びせるがイーグルオルフェノクの上半身を覆う鎧のような羽によって思ったようなダメージを与えられない。

一撃は軽い攻撃でも重なりと恐ろしい、次第に動きにキレがなくなってくるダブル。

「これ、使わせてもらいます」

ダブルは映司が男のしていたベルトを拾いあげるのを見た。イーグルオルフェノクも同様にそれを目撃する。

「映司!?!」

『何、仲間か!?!』

「俺の探してたベルトと違うけど・・・」
ベルトを腰に装着させる。

『馬鹿め、それを使えるわけが・・・!』

「助けることができるのに手を伸ばさなきゃ死ぬほど後悔する・・・」
「!」

「それが嫌だから」

「俺が変身する!?!?!」

『Standing by・・・』

「
变身!
」

第四話 「Kのベルトノ落し物はどこにある?」 (後書き)

映司は果たして変身するのか!?

なぜ、風都にオルフェノクが……? 彼らは何を知っているのか・
・・?

謎が謎を呼ぶ!

次回は『とある街の電波放送』お楽しみに!

番外編 その1

??? 「風の吹き抜ける街、風都のラジオスタジオからこんにちわ！」

??? 「こんちわ！」

映司「えーっと、どさくさでカイザに変身しようとしている火野映司と・・・」

翔太郎「風都のヒーロー、ダブルの左側・・・左翔太郎がお送りするぜ！」

翔太郎「つていうか、なんだこのコーナー？」

映司「作者が息抜きに作ったコーナーで、ライダー同士で語らせるらしいですよ」

翔太郎「・・・・・・・・・・」

映司「どうしたんですか？」

翔太郎「いや、こんなコーナー作って遊んでるなら話のストック作っておけよって思ってた・・・」

映司「メタいですけど、正論ですね！」

翔太郎「ははは・・・、そういえば映司は何歳なんだ？」

映司「え？俺ですか？22歳です。」

翔太郎「（げっ！年上！？）」

映司「歳と言えば・・・。俺、よく実際よりも歳上に見られることがあるんですけど・・・老けて見えますか？」

翔太郎「い、いや・・・。そんなことないぜ」

映司「よかったあ」

翔太郎「（年上とは思わなかった・・・）じゃ、今回のお題に行くぞ！」

映司「はい、今日のお題は『バイク』です」

翔太郎「バイクか・・・」

映司「バイクと言えば・・・。左さんがダブルに変身して乗って、

空を飛んでましたね。」

翔太郎「あー。あれは、ダブル専用のバイクが変装した超音速航空機形態・・・その名も『ハードタービュラー』だ。」

映司「えっ！専用バイクってあるんですか!？」

翔太郎「もちろん、通常形態が『ハードボイルダー』、他にも変装した形態があるぜ」

映司「いいなあ・・・。俺、専用バイクなんかなくて（誰でも乗れるため）自動販売機とか虎にしか変形できないし・・・」

翔太郎「（自動販売機!？虎!？そっちの方がすごいような・・・）」

映司「そういえば、風都にはもう一人のライダーがいるんですよ？」

翔太郎「照井のことか・・・」

映司「その人にも専用バイクってあるんですか？」

翔太郎「あいつは特別でな・・・自分がバイクになって走るんだ。」

映司「ええーっ！走りたいときに走って便利ですね!」

翔太郎「（バイクになることはつつこまないのかよ・・・）そういえば、さっき自動販売機になるっていつていたよな？」

映司「はい」

翔太郎「何か飲み物とか売っているのか？」

映司「えーっと・・・。タカカンとか、バッタカンとか、トラカンとか・・・」

翔太郎「タカ、バッタ、トラ!？どんな飲み物だよ？」

映司「飲み物っていうより、道具です。タカちゃんは偵察、バッタはトランシーバーになりますよ」

翔太郎「って、今持っているんかい!」

映司「何かとよく使うんで一つずつ持っているんです。」

翔太郎「おお！変形した!」

映司「カワイイでしょ?」

翔太郎「ああ・・・。そういえば前回の話の中で一つ気になるこ

とがあるんだが」

映司「なんですか？」

翔太郎「あの携帯電話の使い方、なんでわかったんだ？」

映司「あー、それは後ろで見てたからです」

翔太郎「でも、携帯電話の操作は後ろからじゃうまく見えないだろ？」

映司「確かにほとんど見えませんが・・・手の動きとプッシュ音で大体わかります」

翔太郎「ホントか!？」

映司「あ!そんなこんなで時間がきてしまいました!」

翔太郎「おい、話そらすなよ!」

映司「左さんも何か言わないとこのコーナー終わっちゃいますよ?」

翔太郎「・・・このコーナーはどうだったか?つまらない茶番劇だったか?今後もあるかもしれないがその時は、よろしくな!」

映司「では、最後に次回予告です!」

番外編 その1（後書き）

次回予告

「『ジョーカーエクストリーム!』」

「俺は・・・乾巧。」

「は？お前、何も知らずに使ったのかよ」

「目の前の人を助けるために何も考えず、勢いとノリで・・・」

第五話 「The dead dance in city」

これできまりだ！

第五話 「The dead dance in city」(前書き)

はい、レグサです。

今回は、半熟探偵と無欲ホームレスのお話。
映司が活躍します！

第五話 「The dead dance in city」

12月 10:58 風都廃工場

不思議な携帯に913と入力するとあの電子音が鳴る。

『Standing by...』

自分たちを助けてくれた人を助けるために

「変身！」

『Complete』

身体を黄色く光るラインが駆け巡る。

『ば、馬鹿なっ!?!』

イーグルオルフェノクが驚き、隙ができた。

その隙にダブルは素早くメモリをサイクロンとジョーカーに変え、距離をとる。

「えーっと、これを外して、これにつけてっ」と

映司が変身したカイザがおぼつかない手つきでミッションメモリーをブレイガンに挿入、ブレイガンがブレイドモードになり光の刃が生成される。

「わ！伸びた！」

場が白けるほど素直なりアクションをするカイザ、それに怒りが最頂点に達したのかイーグルオルフェノクがダブルを無視してカイザに襲い掛からんと間合いを詰めてくる。

「シャアアアッ!!」

「映司！」

イーグルオルフェノクを止めようとするダブル、だがそんな心配は
いらなかったようだ。

なぜなら頭に血が上ったイーグルオルフェノクに対してカイザは落
ち着いていたからだ。

飛びかかってきたイーグルオルフェノクをカイザは、逆手に持ち構
えていたブレイガンブレードモードを向ける。

「はっ！」

「ギャアッ！」

居合切りの要領で一閃、黄色い光があっけなくイーグルオルフェノ
クの羽を切り飛ばす。

「セイヤーッ！」

さらにひるんだイーグルオルフェノクを下から上へ袈裟切りで追い
打ちをするカイザ

「ギユウッ！！」

「それ！」

ブレイガンを持ってない空いた手のこぶしがイーグルオルフェノク
のボディに食い込む。

「ゲエエ！」

勢いに押されて柱にぶつかるイーグルオルフェノク、先ほどとは違
い形勢は逆転してしまっている。

その要因としてカイザが強いのもあるが一番大きいのは彼が冷静さ
に欠いてしまったことであろう。

その様子を見ていたダブルがこれを好機と動く！

『今だ、翔太郎！』

「今度こそ決めるぜ！」

『Cyclone, joker. Maximamu drive』
ダブルを包むように竜巻が発生する、その風の力で浮かび上がりイ
ーグルオルフェノクに狙いを定める。

「映司、どいてろ！」

頷いたカイザがイーグルオルフェノクからバックステップで距離をとるのを確認すると

「『ジョーカーエクストリーム！』」

風と共にダブルが真ん中から二つに分かれてイーグルオルフェノクにつっこむ

真ん中から二つに分かれて、だ。ここ、試験に出ます。

『うわあああああ！』

「わあああああ！割れた！二つに割れたああああ！」

もう一人叫んだようだが、とりあえず気にしないでおう。

「どんなもんだ！」

「うぐ・・・」

華麗に着地するダブル、イーグルオルフェノクは人間の姿に戻っている。

「大丈夫ですか！？（二つに割れた意味で）」

「ああ、問題ねえよ。（ダメージは問題ないという意味で）」

ダブルを別の意味で心配しカイザが駆け寄ってきた。

「こ、こんなところで・・・」

「おっと！」

「ぐえっ・・・」

逃げようとする男の襟首をつかむカイザ

「お前の知っていることを教えな！」

『特にオルフェノクについて知りたい』

男に詰め寄るダブル

「ひゃあ！ま、まってください！わ、私はさっきの奴に無理やりやらさせられていただけなんですっ！」

「それは、自分は何も知らない、何も悪くない、だから見逃してほしいっていう解釈でいいのかな？」

怪しく光るカイザの複眼・・・

「ひいつ！」

「左さん、この人どうしますか？」

「うーん、失踪事件に関係してそうだから・・・。警察に突き出してやりたいんだが・・・。」

「失踪事件ですか？」

「ああ、明らかに怪しいし。（白い服と言ったら財団Xを思い出すな・・・。）」

「じゃあ・・・。」

カイザの複眼には、恐怖ですっかり縮こまっている男が写っていた。

~~~~~

「左、協力感謝する。」

「まあ、お互い様だ。お前には色々助けてもらっているしな」

翔太郎は、警官に両腕を抱えられて連行されるあのサラリーマンを見ていた。

あの男はすっかり血の気が失せて、震えている。

「あの男、かなり憔悴しているようだ・・・何があった？」

「さ、さあな。俺は、見てないんだよ」

「見ていない？」

「いや、協力者がいて・・・。」

「協力者？」

照井は訝しげに問うが、左翔太郎はひきつつた笑いを返すだけであつた・・・。

~~~~~

「アंक、お前どこに行ってたんだよ？」

「それよりも・・・お前、ベルトは見つかったのか？」

「・・・・・・・・」

途端に冷や汗が滝のように流れだす映司

「おい」

「ゴメンナサイ・・・・・・・・」

そして、元からのなけなしの小銭がなくなり、アंकがアイスを食べていた。

「それで、代わりのベルトを手に入れたと？」

「うん。なかなか使い勝手いいんだけど・・・・・・・・」

「今のところはその変てこなので我慢してやるが・・・オーズのベルト、見つけるよ！！」

「ハイ・・・・・・・・」

そんなこんなでアंकと共に苦労して探偵事務所まで戻って来た。警察に男を連れて行った翔太郎に遠慮して自力で帰ると言ったのはいいが・・・道に迷い、サンタコスプレした人に絡まれたりと色々疲れてしまった。

「お邪魔しまーす・・・って、あれ？鳴海さんいないのかな？」
事務所内に亜樹子の姿が見えない。

買い物にでも行ったのだろっ、と思う映司は部屋にあるソファに腰かけた。

さつきから体が少し重たい・・・きつと疲労のせいだ。

アंकは、アंकで翔太郎がいつも座っている椅子に腰かけ、アイ

フォンをいじくっている。

「アंक、そこ左さんの椅子なんだから・・・」

「本人がいなければいいだろ？」

「そうだけど・・・」

ため息がでる。気が緩むと眠気が襲ってきた。

少なくなった小銭をどうしようかと考えたのを最後に映司の意識は溶けっていった・・・

どれくらい寝ていただろうか？

正直言うつと寝ていた実感がない。体の疲労が軽くなっただけだ・・・。

映司は辺りを見回すがアंकの姿はなく、独りだった。

「アंकの奴、またどこかにいつちゃったのか？」

探しに行こうかとドアノブに手をかけようとしたとき、人の気配を感じた。

ああ、そういえば・・・寝ていた人がいたんだっけな。

自分が空から落ちてきた時にもう一人助けたと言っていた、そのも

う一人がようやく目を覚ましたのだ。

どこか痛むのか険しい顔をする青年がベットから起き上がろうとしているところだった。

「大丈夫ですか？」

「……」

映司の問いかけに少しぼんやりとしていたが青年は、問う。

「ここはどこだ？」

「風都風花町の鳴海探偵事務所ですよ。」

「風都？」

「あ、知らないんですか？」

「ああ……」

「そうですね。俺も知りませんでしたよ。あ！俺、火野映司って言います。」

目の前の火野映司と名乗る青年は、屈託なくこちらに笑いかけてきた。

「俺は……乾巧。」

「災難だったですよ〜。俺も灰色のオーロラに巻き込まれて、落ちちゃったんですよ」

『灰色のオーロラ』……？

その言葉を聞いた瞬間、黒い水底から記憶が這い上がってきたように感じた。

忌まわしい記憶が……

「大丈夫ですか？何か、飲み物持ってきますけど？」

声をかけられたことで我に返る巧

「別にいい」

「そんなこと言わずに、水ぐらい飲まないといけませんよ？俺、持ってきます」

映司は水の入ったコップを持って戻ってきたので、とりあえず巧は

一気に水を飲み干した。

『　　』

ふと、携帯の着信音が室内に響く。

「この音は・・・」

巧は、この聞き覚えのある着信に驚く。

それには気が付かなかった映司があの手を振り出して電話に出た。

「もしもし？」

『・・・そのベルト、必ず返して貰いますよ。』

「はい・・・？」

一方的な電話に戸惑いつつも相手が本気なのを感じ取った映司、すぐに電話は勝手に切れてしまった。

「あの人の仲間・・・？」

あのサラリーマンのことを思い出す。オルフェノクっていう人達からかもしれない・・・。

「おい、それをなんで持っている？」

巧が難しい顔をしてこちらに聞いてきた。

「ああ、これ？拾ったんだよ。ついでにベルトみたいなものも拾ったんだ」

映司はソファの上に乗っている古びたバックを持ってくる。

中から出てきたのはカイザのベルト一式であった。

あの後、映司は持って帰ってくるためにたまたま見つけた露店で安いカバンを買ったのだ。無論、あんなベルト手に持って街を歩けるはずがない。

「なんでカイザのベルトが・・・」

巧が信じられないように呟く

巧の知っているカイザのベルトは破壊された。破壊されたはずのベルトがなぜ、目の前に存在しているのか？

「これのこと知っているの？」

「ああ・・・」

「本当！使い方知っている？これの詳しい使い方わからなくて困ってたんだ。」

「お前には無理だ」

「え？」

「変身できない」

カイザのベルトは人を殺す。変身したら最後、体が灰になり死ぬのだから・・・

しかし、意外な答えが返ってきた。

「え？俺、変身できたけど・・・」

「は？お前、何も知らずに使ったのかよ」

「目の前の人を助けるために何も考えず、勢いとノリで・・・」
そう言つて笑う映司を見た巧はため息をついた。

誰かを助けるために『人間を殺すベルト』を勢いとノリで？

「・・・しょうがねえな」

カイザのベルトがなぜあるか疑問を抱きつつ、悪い奴には見えない映司に巧は使い方を教えてやろうかと考えた矢先

バリーン！！

映司と巧が音のした方を見ると同時に、何かが盛大に事務所のガラスを割つて中に転がり込んできたのであった・・・

第五話 「The dead dance in city」(後書き)

次回予告

第六話 「時の歪、繋がる世界」

「12月24日、一体どこで時空がねじれるようなことが起こったのでしょうかねえ・・・?」

「それぞれの世界を繋げている糸がおかしくなったんだ。12月24日から・・・」

「デイケイド・・・?」

次回もお楽しみに!

第六話 「時の歪、繋がる世界」 (前書き)

はい、レグサです。

今回は、電王サイドよりお送りいたします。

第六話 「時の歪、繋がる世界」

「君たちは？」

車内に入ってきた良太郎は見慣れない少女とイマジンに気が付いた。

「初めまして、僕はクリス。この子が僕の契約者のユー」

「初めまして・・・」

10歳ぐらいの女の子とクリスと名乗るイマジンがぺこりとお辞儀をする。

「僕は、野上良太郎。初めまして」

「良太郎君、ユーちゃんは消えたお父さんを探すためにここに来たんだって」

ユーと呼ばれた少女の横に座っていたハナが言う。

「お父さんが居なくなっちゃったの・・・？」

「うん・・・」

「で、僕はお父さんを一緒に探してあげるんだ。」

「ところで・・・君は、どこかに所属してる？」

「所属・・・？僕、はぐれイマジンってやつだったんだ。どうしてもそんなこと聞く？」

「いや、最近イマジンたちが集団で何かやっているみたいで・・・」

「はーん・・・。僕がその一味かもしれないと思ったんだね」

「良太郎！ぜってえ、こいつ怪しぜ！」

「Shut up！赤鬼君は黙って」

「くー、そのしゃべり方が気に入らねえ！」

そうだろうなあ・・・。と思う良太郎。

長い付き合いのモモタロスなので本人が苦手としているタイプもなんとなくわかるのだ。

「そっいえば・・・あの黄色い人は誰？」

「ああ、モモタロスと同じイマジンのキンタロスよ。よく、寝てるのよ。」

「あの・・・ちよつといいかな？」

隣でケンカし始めたイマジン二人を止めることもできず、気になっていたことをユーに尋ねてみる良太郎。

「なんですか・・・？」

「君のお父さんが消えたのって12月24日・・・だったりする？」

「うん・・・」

「・・・」

良太郎は、とある確信を持った。

「オーナー、時空の歪みの起点は12月24日ですね？」

「そのようですね」

チャールハンの山に刺さった旗が倒れないように食べていたオーナーがスプーンを置いた。

「12月24日、一体どこで時空がねじれるようなことが起こったのでしょうかねえ・・・？」

「時空がねじれる・・・？」

ユーは、訝しげに首をかしげていた。

~~~~~

知っているだろうか？

世界は一つではない。俗に平衡世界と言われるものがある。生物が一つの祖先から進化してきたように『とある世界』から無数

の世界が生まれ、その軌跡は樹系図を描く。

ネズミ算の如く増えた無数の世界は様々な分岐点を越え、あるであろう未来に進む。

秩序がない分岐、複雑化する平行線……

それらが描く樹系図は無駄に花を咲かせてしまった樹のようである。

面白いことに分岐の要を一つ無くしてやるだけで目まぐるしく世界は変わる。

風が吹けば桶屋が儲かるといったところだ……。

~~~~~

「あの、時空のねじれってなんですか？」

ユーが良太郎に問うてきた。

「時空のねじれってというのは……リュウタロス、紙を一枚もらってもいいかな？」

「うん、いいよ」

リュウタロスから貰った紙に丸を三つ並べて描いた。

「この丸が12月25日だったり、12月24日だったり、12月23日だったりする・・・」

丸の上に良太郎は日付を書き入れる。

「この丸は、25日の世界、24日の世界、23日の世界のこと」

「25日の世界・・・？」

「うん、なんでかよくわからないけど・・・世界は、日付ごとに存在するんだよ」

「じゃあ、11月11日の世界もあるの？」

「そいうことになるね」

紙の隅に丸を描いて11月11日と書き入れた。

「それぞれの世界は、時間によってつながっているんだ。」

丸の間に線を引いた、まるでできそこないの団子のような。

「そのことによって世界は連続性をもって・・・」

「ど、どういうこと？」

「えーっと・・・」

「ユー、バラバラのビーズをまとめたいとき君はどうする？」

クリスが話に割り込んでくる。

「え・・・？箱にしまったり、紐に通したり・・・」

「That's right!まさにビーズを紐に通してあげればきれいに並んでくれるね？」

「うん」

「つまり、紐が時間でビーズが25日の世界や24日の世界さ！それできれいに並んでいるってこと。わかった？」

「うーん、なんとなく・・・」

色とりどりの透き通る玉が見えない糸で並んでいる様を思い浮かべる。

「それぞれの世界を繋げている糸がおかしくなったんだ。12月24日から・・・」

「おかしくなるって・・・？」

「繋がるはずのない他の世界に繋がったり、それぞれの世界の未来が不安定になっているんだ」

「繋がることのない？未来が不安定って？」

「ユーがさらに聞こうとすると車両の向こうがなんだか騒がしい。」

「なんだろう・・・？」

良太郎は、訝しむ。隣の車両はあんなにうるさかったっけ？と・・・

「私のケーキ返してください！」

女性の悲鳴のような叫び声がある。

そして、何人かの足音がバタバタと響いたかと思えば、誰かの笑い声が聞こえてきた。

「なんだ、なんだあ？」

モモタロスが車両のドアを開けると同時に笑いながらそれは入ってきた。

「うわぁ！お、お前どうしてここに！？」

知っているらしくモモタロスがそれに声をかける。

「あっははははははっ・・・よ、よう。あははははは・・・」

笑いすぎたのか苦しそうな若い男の声は、目の前の鮮やかなピンク色に黒と白が入った人型からでていた。

「デイクイド・・・？」

良太郎がその名を口にする。いつだったか、どこかでであったその名を・・・

第六話 「時の歪、繋がる世界」(後書き)

??? 「ついに俺たちの出番が来たぜ！」

??? 「やつとだな・・・」

次回予告

「りゅ、龍がシャベッタアアアア！」

「お前、仮面ライダーなのか!？」

「そうみたいなんだ。言葉ではうまく言えないな・・・多分、街を見てくれればわかってくれると思うけど・・・」

「そりゃそうだよなって・・・あれ？」

第七話 「In the silent world」

第七話 「In the silent world」(前書き)

はい、レグサです。

ついにあの仮面ライダー達が登場！

第七話 「In the silent world」

12月24日 ?? : ?? ? ???

剣崎一真は、どうしてこんな目に合っているのか全く理解できなかった。

日頃の行いが悪いせい？

今日の運勢がよくないせい？

いや、日頃の行いは……たぶん大丈夫。星座占いなんてあまり信じていない。

そんなことを考えながら全速力で彼は走っていた。山の傾斜を走り抜けるのは正直きつい……。

（どうしてこんな目に合わなきゃいけないんだ！？）

もう一度、自問するが酸素が足りない脳は考えるのを放棄した。

先ほどから心臓の拍動が鼓膜を圧迫し、呼吸する音がうるさいノイズのような音をたてている。

背後を振り返る。

「ぎよぎぎぎ」

蜘蛛のような化け物がこちらに襲い掛からんと迫っている。なんとなくわかってしまう。こいつ、俺を喰うつもりだな……。大きく開かれた口から少し粘性のある液体を垂らしている。

涎だ。

ああ、走るのを止めて楽になりたいと思いが頭をかすめる。

なんたつて半日走り続けているからだ。半日、だ。もう、心が折れそうだ……。

でも、走るのを止めたらアイツに喰われる。喰われたら痛い。

しかも、俺は『死ぬ』ことができない……。

「や、やっぱ無理だあああああああああ！」

剣崎は叫ぶと一段と速く走っていく、蜘蛛とともに……。

このまま永遠に鬼ごっこをするなんてまっぴらだ。

誰か……神様でもなんでもいいから助けてくれ！剣崎はそう祈った。

それが日本にいる八百の神様の一人にでも通じたのか

『ストライクベント』

天罰というように蜘蛛の化け物めがけて炎が落ちてきた。

炎上する蜘蛛、なすすべがないのかその場に倒れ込み、激しく悶えたかと思うと動かなくなった。

「た、助かった……」
長時間のマラソンから解放され膝をついた剣崎は、炎が降ってきた灰色に淀んだ空を見上げた。
そこには

「大丈夫かー！」

燃えるような紅の龍がいた。

「りゅ、龍がシャベツタアアアア！」

驚く剣崎は腰を抜かすが龍の上から紅く、顔が騎士を思わせる仮面で覆われた戦士がひよっこり顔を出して手をこちらに振っている。

仮面ライダーか？と思ったがあんな姿は見たことがない。でも、似た存在なのかもしれない……。

そんなことを考える剣崎……。

「今、助けてやるからな！」

どうやら龍に乗っている彼が声をかけてくれたらしい……。

某日本の昔話のアニメのOPを思い浮かべた剣崎だが気にしないでおくことにした。

「そのまま動くなよ！！」

彼は、龍を減速させながらこちらに迫ってきた。

「ウェツ！？」

迫りくる龍の迫力に素っ頓狂な声がでてしまった剣崎、そのまま腕をつかまれて龍の上に引き上げられる。なんだか彼は急いでいるようだ。

「早く！奴らが群がってくる！」

「あ、ああ。」

急かされるまま腕を引かれつつよじ登ると気のせいか周りから何かの鳴き声が聞こえているのに気が付いた。焼かれた蜘蛛と同じ怪物

が取り囲んでいるのだ。

「しつこいつての！」

剣崎を引き上げた彼は、ベルトから何かのカードを取り出した。ラウズカード？と思った剣崎だが明らかに違うカードである。

「ぎしゃぎざぎ」

「ぐぐぐ」

訳のわからない鳴き声を出す怪物を見据えつつ、腕の龍の頭を象つた何を開きカードを中に入れる、カードリーダーの類のようだがスラッシュ式ではないようだ。

『ストライクベント』

無機質な音声と共に彼の腕に龍の頭が付く。

「はああっ！」

気合の声とともに腕を前へ突き出すと紅い龍がその口を開き業火を吐き出す！

その赤い炎は、地面に燃え移り瞬く間に蜘蛛たちを巻き込み広がっていった。

「つしゃ！今のうちに逃げるぞ！」

「ぐおおおお・・・」

彼の声に答えるかのように赤い龍はひと鳴きすると緩やかに上昇し始めた。

「俺、城戸真司。お前は？」

「剣崎一真。本当、助かった・・・。気が付いたら知らない場所に転がっていて、いきなりあんな化け物に追いかけられていたんだ」

「俺もいきなり別世界に飛ばされてびっくりしたよ」

「（別世界・・・？）」

「っていうか、お前この姿見ても驚かないのか？」

城戸が剣崎に問う。

「それは・・・似たようなものをよく見てたからな。それにそれどころじゃなかったし、死ぬか生きるかの瀬戸際に細かいことなんか気にしてられない」

実際のところ、彼よりも龍の存在にとっても驚いた剣崎である。

「そ、そうか・・・。この姿は仮面ライダー『龍騎』っていうんだ。今乗っている龍は、ミラーモンスターのドラグレッダーだ」

「お前、仮面ライダーなのか！？」

「うん・・・。まあ、好きでなったわけじゃないけどな」

城戸が力なく笑った。

「（好きでなったわけじゃない・・・？）」

その言葉に引つ掛かりを覚えつつ剣崎は聞きなれない言葉について聞くことにした。

「ミラーモンスターってなんだ？」

「うーん、お前がさつき追いかけていたのもミラーモンスターのデイスパイダーっていう奴」

「だから、ミラーモンスターってなんだよ」

「えーつと・・・、鏡に住んでいる怪物って感じかなあ」

「鏡？じゃあ、ここは鏡の世界なのか？」

鏡の世界など俄かに信じがたい話である。

「そうみたいなんだ。言葉ではうまく言えないな・・・多分、街を見てくれればわかってくれると思うけど・・・（でも、制限がないのもおかしいな・・・）」

「街があるのか？」

「あ、ああ。かなり遠くだけどあるんだ」

「こんな化け物だらけなのによく住んでいられるな」

「それなんだけど、人が誰もいないんだよ・・・」

「何？」

「俺が見た分じゃ、街には誰一人もいないんだ」

「・・・・・・」

「ミラーモンスター以外にもゴキブリみたいな奴がいるんだけど、そいつらに襲われたとき数が多くて一回本気で死ぬかと思った。」
重い空気が流れる。心なし先ほどの元気が城戸にはない。

「ゴキブリみたいな奴・・・・？」

「丁度あそでミラーモンスターを喰っている奴らだ」

遙か下になった地上に黒い何かが群がっている。

アイツらは

なんでアイツらがいるんだ？

どうして？

わからない

忘れもしない、破滅をもたらす『ダークローチ』に他ならなかった。
「でも」

愕然とする剣崎だが城戸が口を開いた。

「一真に会えてよかったよ。本当に独りだったら・・・・って、すごく怖かった」

「・・・・お互い様だな」

「へへッ」
「ははっ」

くくく

地上は、危険なので城戸と剣崎はドラグレッダーに乗って空を進んでいた。

もちろん、上空いえど安全ではない。

トンボが頭に着いたようなミラーモンスターが時々襲ってくる。

「もう、しつこいな！」

『ストライクベント』

空を飛びまわるだけあって、素早くなかなかあの炎でも撃ち落とす切れていない。

「ぎぎぐぎ・・・」

「があぎぐ」

「くっそ！剣崎、気をつけろよ！」

『ソードベント』

先ほどとは違う音声とともにドラグレッダーの尾を模した剣がどこからともなく降ってきた。

それを見事につかむと流れるような動きでトンボ頭を切り裂いていく。

「ぎあぁぐー！」

「ぎぎぎぎ！」

乗っているドラグレッダーも炎を吐いたり、かみ砕いたりしながら応戦している。

状況は、一見よさそうだが・・・

「うわぁ!？」

群がるトンボの一体が無防備な剣崎に襲い掛かってくる。

「一真!？つぐぁ！」

「真司！」

それを城戸がかばったのはいいがトンボともつれあってバランスをくずす。

「危ないっ！変身！」

剣崎が腰にベルトを装着して叫ぶ。

『T e r n U p』

音声とともにオリハルコンが現れると剣崎がそれにつっこむ、すると

青い姿に剣を携えた戦士が現れた。

「誰かが戦っているのを黙って見てられない！俺も戦えるんだ！」

そう、それが仮面ライダーブレイド。

ブレイドは手に持っているブレイラウザーでトンボ頭を龍騎から切り払う。

「一真!？お前、仮面ライダーだったのか・・・?」

「そうだ！俺は、仮面ライダー！俺は、戦えない人達のために戦う

！」

「！」

「真司、来るぞ！」

「ががぎ！」

「ぐづぁぁ！」

襲い掛かるトンボ レイドラグリーン

それを青い戦士と赤い戦士が切り払った・・・。

~~~~~

「ぐおおおお・・・」

レイドラグーンの群れを追い払い灰色にくすんだ空の下、立ち込める靄を切り裂くように進んでいくドラグレッダーが何事か鳴き声を上げた。

「どうした、ドラグレッダー？」

「街が見えてきたな」

剣崎が靄の中にぼんやりとビルが立ち並んでいるのに気が付いた。いつの間にか目下に広がっている街・・・何か違和感がある。

目をこらして靄の街を見るとありとあらゆる建物のガラスは割れ、建物が煤けている・・・

それ以上にかろうじて残っている看板や道路標示など文字という文字が鏡文字になっているじゃないか！

「鏡の世界っていうのは、文字が鏡文字になるんだ」

城戸が呟いた。

「信じられない・・・」

「そりゃそうだよなって・・・あれ？」

城戸は仮面の奥からその光景を凝視する。

ビルの群れが続いていたが前方に平原のような場所が見えてきたのだ。

こんなところあったっけな・・・？

平原のように見えるのは、何かが中心で爆発して辺りのビルが完全に崩れているせいだろう。

しかも、その瓦礫の平原に男が一人立っているではないか……。

「ぐおおおおおお……」

ドラグレッダーは、低く小さく鳴く。あれには近づきたくないと言っているよう、城戸はそう感じた。

でも、人だ。このことを知っているかもしれない。

「一真」

「ああ、行こう。」

地上に降りた城戸と剣崎

不思議なことにこの周辺は全くミラーモンスターたちが見当たらない。

しかし、何かあった時のためと城戸は変身したまま、瓦礫の平原を進んでいくと先ほど見た男がいた。

煤けた黒いコート、汚れた白いマフラー、両手は寒さから守るようにポケットにつっこまれている。

寒くもないのに……季節感のない格好だ。そんな恰好で平原の中心に足元を見つめて立ち尽くしている。

その男は足元の一枚の写真を見つめていた……。

第七話 「In the silent world」(後書き)

今まで出てきたライダー「」「」「お前ら一体なんなんだ!？」

「

剣崎・城戸「さあ・・・?」

次回予告

第八話 「現れたOノ帰ってきた失踪者」

「ね、ねえ・・・。これ?何?」

「バイク、変形する」

「昨日、帰ってきたよ。」

「『奇跡の病院』だろ?インチキ臭いな・・・。」

来週もお楽しみに!

## オリジナル（？）登場人物紹介（前書き）

はい、レグサです。

今回は、この物語に出てきたオリジナル（？）の人たちを少し紹介します。



## オリジナル(?) 登場人物紹介

ユー

十代ぐらいの人間の少女、ストレートの長髪と大きな目が特徴的。生まれて間もなく母親を失い、父親の手で育てられてきた。超のつくパパっ子だったりする。

12月24日の出来事からイマジンの『クリス』と出会った。どうやら特異点のようだが・・・

クリス

突如ユーの前に現れたイマジン。

ユーの『不思議の国のアリス』からウサギというイメージにより、ピンク色の燕尾服を着たようなロップイヤーの姿をしている。

一人称は『僕』だが、決して幼い訳でない。話す言葉の中に時々英語が混じるのが癖。

イマジンなので戦闘能力はあるが、本人戦うのは好きでない。

樹田哲郎

ユーの父親、何かしらの研究をしていたようだが・・・？

12月24日の出来事から消息不明

その他一切不明

## オリジナル(?) 登場人物紹介(後書き)

話が進めば、また増えるかもしれません。

では！

第八話 「現れたOノ帰ってきた失踪者」(前書き)

はい、レグサです。

電王・ブレイドサイド「「毎回、ダブルサイドの話、俺達の話より長くないか!?!」」

アंक「(話の)長さは気にするな!」

## 第八話 「現れたO／帰ってきた失踪者」

12月25日 5：48 風都風花町

勢いよく飛び散るガラス

その欠片の一つ一つが夕焼けの光を受けてきらきらと輝く。

きれいだなあ。と思った瞬間、重低音とともに人型の何かが受け身を取りながら転がり込んで事務所の壁を少しへこまして止まった・・・。

もう一度言つと重低音とともに人型の何かが受け身を取りながら転がり込んで事務所の壁を少しへこまして止まったのだ。

あつけにとられる二人

止まったそれは立ち上り、人の動きではなく機械のような素振りはこちらに顔を向けた。

顔にあるディスプレイに光が走る。

どうやらこちらに何か伝えようとしているような・・・。

「・・・・・・・・何やってんだ、お前！」

先ほどまで寝ていたと思えない素早さで人型のそれを足蹴にする巧。

「え？え？ええー！？」

何が何だかわからない映司はうるたえている。

「今の今までどこに行つてたんだ！たつく・・・来てほしいときに来ないで！」

『Veagle mode』

足蹴を続ける巧、それに耐えかねたのか相手は電子音を鳴らすと変

形してバイクになり、部屋はバイクが鎮座するという違和感のある空間になってしまった……。

「ね、ねえ……。これ？何？」

「バイク、変形する」

「はぁ……。」

よくよく見るとかなり使い込まれたバイクのようだ。汚れや傷、何かぶつかったような凹みが目立っている。

まじまじと映司がバイクを見ていると巧がバイクの傍らに転がっている小さな金属製のトランクを拾い上げる。

スマートブレインというロゴが入っているトランクを開けるとカイザのベルトに似たベルトが入っているものだ。

「ファイズギアはあるか……。カイザもある……。デルタは……？」

何事か呟く巧

「俺の拾ったのとそっくりだ」

「……。カイザはファイズを改良したもんだからな」

「へー、そうなんだ」

「……。」

そこで映司が一番肝心なことを思い出す。

「窓ガラスのこと、左さんにどういえばいいかなあ……」

~~~~~

「どわあああああつ!? 窓ガラスが!？」

戻ってきた翔太郎は、この異様な空間に驚いた。

「巧くんのバイクが勝手に飛び込んできて・・・」

「バイクが飛び込んでくるってそんなことあるのか?!」

ガラスの破片は片づけ、窓に新聞紙を張って隙間風が入るのを防いでいるが見られたものではない。

しかも、どこかの店のディスプレイのようにバイクが部屋の真ん中に居座っているのである。

「このバイク、変形するのかい? ぞくぞくするねえ・・・」

フィリップが興味深そうに部屋に鎮座するバイクを眺めている。

「なんで窓なんだよ!？」

「しらねえーよ」

ぶつきらぼうにベットに寝かされている巧が答える。あの後、映司に無理やり寝かされたのである。

「とりあえず・・・」。亜樹子が帰ってくる前になんとかしねえとな・・・」

翔太郎が窓ガラスをどうしようかと考えていると・・・

「ただいまー!」

亜樹子が元氣よく帰ったきたのであった。

「あれ? 翔太郎君、窓ガラスに張り付いちゃってどうしたの?」

「こ、これは・・・」

不自然に窓に背を押し付けている翔太郎、だが悲しいかな張られた新聞紙が見えてしまっている。

「なんで新聞紙なんか張ってあるのよ?」

「そ、それは・・・」

うろたえる映司、言い訳したいところだが・・・何も思い浮かばな

い。

「な、なんなのよこれ！？窓ガラス割れたなんて、あたし聞いてない！！翔太郎君？これはどういうことよ！？」

一気にまくしたてられて翔太郎は、映司を指さす。

「映司くん？どういうことなの！？」

「えーっと、このバイクが突然窓から飛び込んできて・・・」

「誰のバイクよ！？」

「巧くんの・・・」

「巧？あなたが！？」

「バイクは俺のだが、勝手に飛び込んできただけだ。俺は悪くない」
ぶつきらばうに答える巧に亜樹子の堪忍袋の緒が切れた。

~~~~~

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

男三人は、事務所の外で座り込んでいる。なぜそんなことになったかというと、窓ガラスの件ですごい剣幕で喚く亜樹子に事務所から締め出されてしまったのであった・・・。

実に情けない姿である。しかも、クリスマスに・・・。

「それにしても、腹減ったな・・・」

「俺もです」

「俺なんかなんも食ってねえよ」

もう、六時を過ぎた・・・腹が減ってきそうな時間だ。

「風都ラーメンでも食いに行くかな」

「風都ラーメンって、ここのご当地ラーメンですか？」

「そんなところだ。大きなナルトが特徴だな」

翔太郎は、映司と巧を連れて『風麺』にやってきた。

「おっさん、風都ラーメン三つ！」

「はいよ」

「うわー、屋台のラーメンなんて食べたことないんですよ、俺！」

屋台式のラーメン屋にはしゃぐ映司の横で巧が寒いのか丸くなっていた。

「あんま熱くすんなよ」

「あれ？巧君って、熱いの苦手？」

「ああ・・・」

「へい、お待ち」

三人の目の前にラーメンが置かれる。

寒い風に暖かい湯気がなびく、大きなナルトがとてもおいしそうだ。

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます・・・」

「かなり時間がたったな・・・」



翔太郎が時間を確認すると七時近い

「冷ますのに時間、かかり過ぎだよ？」

「屋台のおやじが全然冷ましてないからだ」

「はぁ、多分まだ亜樹子の癪癪玉は・・・まだ、治まってないだろうな。ちよつと、失踪事件について聞き込みでもするか・・・」

ここからほどなく近いところに失踪した人の家がある。

そこへ翔太郎は、二人を連れてやって来た。

「近所の人からあたってみるか」

「聞き込みって奴ですか？」

「あぁ。映司も手伝ってくれるか？人出が多い方がいい」

「いいですよ。俺、向かい側からやります。」

「映司と聞き込みしてきてくれるか？」

翔太郎が巧に問う

「・・・わかった」

怪訝な顔で頷くと二人は、向かい側の家へと向かっていった。

二人を見送った翔太郎は、さっそく聞き込みをするために歩き出す。

「さて、聞き込みすっか！」

そんなこんなで何件か回ったが留守が多い。

まぁ、クリスマスの夜なんだし家族ぐるみで外食にでも行っているんだろう。

あまり人に話を聞けないまま翔太郎は、とある和式の一軒家にやって来た。和式と言っても立派な木製の門に不自然にインターホンが取り付けられている。

インターホンを押すとベルがなった。

翔太郎は閑静な住宅街に相応しい立派な玄関、広い庭が見えるのに気が付いた。

玄関が開いた。

玄関から老人がでてきて庭の方へ向かっている。

「あ、あの〜」

こちらに気が付かない老人に声をかけると老人はあわてて門を開けた。

「すみませんの、歳で耳が遠くて」

「いえいえ……。私、鳴海探偵事務所の左翔太郎という者ですが・  
・。」

それを聞いた老人が怪訝そうな顔をする。

「探偵さんがどうなさったのか？」

「松山清さん、ご存知ですか……？」

「松山清さん……。ああ、清の奴のことか！アイツのことはよく知つとる。」

「お知り合いでしたか。では、松山さんが失踪したことは……？」

「はい？アイツが失踪？」

「え？」

「昨日、帰ってきたよ。」

「帰ってきた……。本当に松山さんでしたか？」

「ああ、間違いない。なんせ、よく顔合わせるんだからなあ。アイツの顔は、見飽きちゃったよ。」

お年寄り独特の笑い声を出す老人

「いきなり失踪したとか聞いたから驚いたけど、どこぞにでも遊びに行つてただけだろ」

「じゃあ……。今、自宅にいらつしやるんですか？」

「いや、病院に入院してるよ。ワシもアイツに進められてそこに健康診断にいったよ」

「入院……。？それは、どこの病院ですか？」

「なんて名前だっけなあ……。思い出せん、こりゃいかな。探偵さんよ、立ち話もなんだから家においでなさいな」

翔太郎は、老人の家へと案内される。

「まあ、座んなさい」

「ありがとうございます……。」

案内された居間には独り暮らしのせいかクリスマスの飾り付けなどされていない。

ただ、そこに元から置かれている年季の入った家具たちが重々しい雰囲気を醸し出している、とソファに座った翔太郎はそう思った。

「ちよつと待つてくださいな。あの病院のパンフレットがあるからな」

老人は、引き出しを開けてそこから出てきた薄っぺらい紙を翔太郎に渡してくれた。

「その病院は、最近できたばかりなんだよ。行くのに苦労したわい……。」

表紙には『小早川クリニック』と書いてあり、子供の絵本にいそうな動物たちが描かれている。

ここまでならどこにでもありそうな個人経営の病院だが、病院を撮ったという写真にはオフィスビルが写っていた。

「これが『小早川クリニック』ですか？」

「そう、中はすごかったぞ。でも、すごいのはそれだけじゃない」

「それは……？」

「どんな病気でも治してくれるんだ。『奇跡の病院』って、ところだな。その内、死んだ人間も蘇らしてくれそう……これは、冗談冗談」

笑う老人だが、翔太郎は『奇跡の病院』がうんざり臭く感じた。

現代の医療が発達しているからと言って、どんな病気でも治せるなんてありえない……。

人には限界があるものだ。

しかし、失踪したはずの人間がそこにいるならその病院を調べる必要がありそうだ。

翔太郎は、老人に礼を言うとパンフレットをもらって映司と巧と合流するために門を出たのであった。

~~~~~

すこし時間は戻る。翔太郎と別れた後一軒の家にやって来た映司と巧。

翔太郎から肝心の失踪者のことを聞いていなかったため失踪者に関して何も聞けなかったが……

「『奇跡の病院』ですか？」

近所に住んでいるらしいおばさんから話を聞いている最中である。

「そうなのよ。なんでも病気を治してくれるって言つものよ！すごい？ 癌でもリウマチでもすぐに治してくれるっていうのよ！？」

「す、すごいですね」

「あたし、その病院行ってみただけど・・・すつごくきれいで雰囲気も良かったわ」。それで健康診断

やってもらったんだけどね・・・血糖値が少し高いって言われちゃったのよ！もう、びっくりしたわ！」

「血糖値が高いって・・・大丈夫なんですか？」

「そう、あたしもそう思ったんだけどね」。大丈夫だって先生言ってくれたのよ。薬飲み続けるだけでいいって！」

おばさんが何やらカバンを開けて小さな袋を出してきた。

「この薬、何でも効くらしくって！すごいわよねえ！」

透明な袋には青い錠剤が五つほど入っている。

「あ、そういうのって万能薬っていうんですよね」

「そうそう！まだ、飲んでないんだけど持病の腰痛も治るかしらねえ」

「そうだいいですね」

むつつりと横で話を聞いていた巧だが、青い錠剤に引っかけかりを覚ええた。

それを見ていると何か嫌な気分がする。

色が真つ青だからか？と自問自答してみるがわからない。

ただ、直感がそう感じているだけのようだ。

「それじゃあ、あたしそろそろ帰らなきゃ」

「おい・・・。それもう少しく見せてくれ」

「巧くん・・・？」

「そんなにみたいなら『小早川クリニック』に行けばいいわよ？あそこ、若い人向けに健康診断無料でやっているわよ？」

「・・・わかった」

「お話聞かせていただきありがとうございます」
「いえいえ、それでは」

おばさんが去っていくのを見送っていると逆方向から声をかけられた。

「お！二人ともなんか話は聞けたか？」

「あ！左さん。俺たち立ち話ぐらいしかできませんでしたよ」

「え？」

「失踪者の名前ぐらい教えてくれないとな・・・」

「だから、俺達なんにも聞けませんでした」

「あゝ、そういえばそうだったな。すまねえな」

「それで、左さんは何か聞けましたか？」

「ああ、失踪者らしいひとが入院している病院がある。」

「失踪者が入院ですか？」

「しかも、インチキ臭い病院ときた。これは何か裏がありそうだな・・・」

「インチキ臭いって・・・『小早川クリニック』のことか？」

「ん？なんでお前が知ってるんだ？」

「さっきその話を聞いていたんですよ」

「『奇跡の病院』だろ？インチキ臭いな」

巧が嫌そうな顔をする。

「そこには明日行くことにして、そろそろ帰るか・・・」

「亜樹子さん、もう怒っていないといいんですけど・・・」

三人は、風都の夜風を受けながら鳴海探偵事務所に帰って行った。

今夜は、遅めのクリスマスパーティー。

皆で食べたり、騒いだりしたとさ・・・（映司達は遠慮した）

第八話 「現れたOノ帰ってきた失踪者」(後書き)

翔太郎「Orz」

映司「どうしたんですか、左さん？」

翔太郎「修理代・・・窓ガラスの修理代・・・」

巧「しょうがねえだろ」

翔太郎「なぜ、窓ガラスは割られなければいけなかったんだ!？」

映司「作者の気紛れ、じゃないですか？」

翔太郎「Orz」

映司「そんなに落ち込みにくださいさよ。いいこと思いついたんですけど、作者に修理代を請求しましょうよ!」

巧「作者に・・・?でも、どうやって？」

映司「色々方法はあるけど・・・手っ取り早いのなら実力行使かなあ・・・。」

『Standing by』

「へんしーん!」

『Complete』

映司「じゃ、行ってきましたーす!左さん、待っていてくださいね。俺、絶対に修理代を手に入れますから」

巧「・・・・(作者、死ぬな・・・)」

~~~~~

城戸「えー、諸事情により作者不在で俺が代わりに次回予告するぞ!」



城戸「次回予告！番外編第二弾！」

「なんか虚しくなったから話、進めるか・・・」

「カードライダーっただけ」

「意地でも別の共通点を探し出してやる！」

「でも、公式と違うな。公式エ・・・」

城戸「次回もお楽しみに！」

剣崎「お、俺はっ！？」

城戸「出番なし」

剣崎「Orz」

番外編 その2（前書き）

「風都のラジオスタジオで謎の放送をやってるらしい  
そんな噂の存在を知り捜査してきたが、今回その放送の一部を録音  
することに成功した！今から再生するのがその放送だ。心して聞いてほしい！」

「会長、暇人ですね」

「それは言わないでほしかったよ！」

## 番外編 その2

???「風吹く街風都のラジオスタジオから、こんにちわ」  
???「こんにちわ」

剣崎「職業は仮面ライダー！剣崎一真と・・・」

城戸「初登場で変身しっぱなしだった、城戸真司でお送りするぜ！」

剣崎「・・・風都ってなんだ？」

城戸「え、え？ってか、台本にないこと言っなよ！」

剣崎「いや、切実に気になっていたんだが・・・」

城戸「知らないことは気にするな！（キリッ）」

剣崎「で、何をすればいいんだ？」

城戸「（うわあ、スルーされた）えーっと、『今までの話について語れ』だって」

剣崎「前回と違ってかなりアバウトだな・・・。今までの話って何があるんだ？」

城戸「プロローグ」とある少女の話」

第一話「風の街に揺れるオーロラ」

第二話「Oの回想／ベルトを無くしたライダー」

第三話「兎と電車と鬼」

第四話「Kのベルト／落とし物はどこにある？」

第五話「The dead dance in city」

第六話「時の歪、繋がる世界」

第七話「In the silent world」

第八話「現れたO／帰ってきた失踪者」

の以上だ」

剣崎「俺たちが登場したのって、第七話だけじゃないか！」

城戸「そうだなー。」

剣崎「・・・なんか虚しくなったから話、進めるか」

城戸「そういえば、この話は仮面ライダーが別の仮面ライダーと出

会ったよな？」

剣崎「いわゆるクロスオーバー的なものだ」

城戸「結構、ライダーってでてきたよな」

剣崎「そうだな。今まで出てきたライダーの組み合わせは？」

城戸「えつと・・・、この話で出会ったのは、オーズとダブルとファイズ、電王とディケイド、ブレイドと龍騎ってところか」

剣崎「何か、それぞれ繋がりはあるのか？」

城戸「それについて俺、調べてきたんだよ！」

剣崎「イツノマニシラベテキタンディスカ!？」

城戸「・・・え？」

剣崎「い、今のは気にするな!（つい、驚くと滑舌が悪くなる癖どうにかしいとな・・・）」

城戸「はあ・・・。えつと、オーズとダブルが映画共演（MEGA MAX入れて三回?）」

剣崎「確かに、それしか思いつかない・・・」

城戸「オーズとファイズはオーズに変身する人がファイズになったから、らしい。」

剣崎「・・・（かんぺを見る）作者もファイズが一番好きらしいな（棒読み）。」

城戸「どうでもいい情報は置いておいて、電王とディケイドは映画共演（確実に二回は共演）。同じだな」

剣崎「ブレイドと龍騎は・・・?」

城戸「カードライダーってだけ」

剣崎「それだけ？」

城戸「それだけ」

剣崎「再び虚しさを覚えた・・・」

城戸「そんなこというなよ・・・。」

剣崎「意地でも別の共通点を探し出してやる!」

城戸「まあ、がんばってくれよ・・・。で、話が変わるけど公式の設定じゃオーズよりダブルの左サイドは年上らしいぜ?」

剣崎「確かに、この前指摘されたな（作者が）」

城戸「前回の放送じゃあ、左サイドの方が年下になっているっぽいけど・・・」

剣崎「それについては、のちのち分かるらしい」

城戸「でも、公式と違うな。公式エ・・・」

剣崎「まあ、この話も一種のパラレルだからな。そういうこともあるだろ。」

城戸「この先にも実は！ってことがあるかもしれないな」

剣崎「パラレルならなんでもあり、か・・・」

城戸「魔法も奇跡もあるんだよ・・・！」

剣崎「やめる。お前が言っていると嫌な予感しかしない。」

城戸「え？どういう意味だよ？俺、魔法少女になれるの？」

剣崎「・・・」

城戸「ちよつ、ちよつとまで！ブレイウザー生身で召喚して構えるな！暴力反対！ノーモアライダーバトル！」

剣崎「生身だからライダーバトルじゃないぞ？」

城戸「いや！そういう問題じゃないから！」

剣崎「そうだな。生身で相手に武器を向けるなんていけないな（カードをバツクルにセットする音）」

城戸「って、いいながら変身しようとするなああああ！！」

剣崎「冗談だ」

城戸「ゾゾーツ（鳥肌）」

剣崎「とりあえず、行き場のない怒り（？）をこんな台本書いた作者へ向けるかな」

城戸「あ、ああ・・・」

剣崎「サングラス持っていないか？黒いの」

城戸「は？いや、持っていないと思うけど・・・。何故？」

剣崎「サングラス（黒に限る）をかけると一気に最強フォームに変身できるんだ、多分」

城戸「（何言っただこの人！？）・・・と、言うことでお別

れの時間が来たぜ！」

剣崎「おい、スルーするな！」

城戸「次回予告でさようならー」

剣崎「・・・さよなら」

## 番外編 その2（後書き）

映司「おはこんにばんわ！」

アंक「なんだその挨拶は!？」

映司「いや、これを見ている人たちはいろんな時間帯で見ているから・・・」

アंक「一つにまとめたって訳か」

映司「そうそう！」

アंक「で、俺達は作者の代わりに次回予告をするってことか」

映司「そうだよ。じゃあ、次回予告はいりまーす！」

アंक「次回予告！」

映司「第九話『重・力・落・下』」

「じゃあ、なんでお前はここにいるんだ？この世界になんで人間がいないんだ？知っているか？」

「まあ、この世界のことはとりあえず忘れろ」

「ドラグレッダアア  
!!!!!!!!!!」

「アンノウンの仕業だ」

アंक「次回も」

映司「お楽しみに！」

アंक「・・・さて、やることやったから帰って、アイス喰って寝るか」

映司「アイス、一日一本」

アंक「！？（目が紫！？）」



## 第九話 「重・力・落・下」(前書き)

城戸「前回あった三つの出来事！

一つ！剣崎一真は、気が付いたら別の世界にいて蜘蛛の怪物とマラソンをしていた。

二つ！それを助けてくれた仮面ライダー龍騎こと城戸、二人は行動を共にする。

三つ！そして、人の存在しない鏡写しのような世界にコートを着た謎の男はいた。

ってところかな？」

## 第九話 「重・力・落・下」

城戸と剣崎の二人は、男がいる平原の真ん中へとやって来る。そんな彼らの足音に気が付いたのか、男が顔を上げた。

「……龍騎にブレイドか。どうしてここに来たか知らねえが難儀なところに来たな」

龍騎は城戸のこと、ブレイドは剣崎をさしているようだ。

「なんでブレイドのことを知っている……!？」

いきなり、見知らぬ男からブレイドのことが出てきて驚く剣崎。

「そんなことはどうでもいいだろ。お前ら、そんなこと聞かためこの世界に来たのか？」

「そういうお前は、この世界の人間か？」

剣崎が男に問うてみる。

「この世界は人間なんて存在しない。『できそこないの世界』だ。」

「は？お前もほかの世界から飛ばされてきたのか？」

今度は、城戸が問う

「違う」

男が少し疲れたような顔をした。

「じゃあ、なんでお前はここにいるんだ？この世界になんで人間がないんだ？」

「俺と一真はどうして、その？『できそこないの世界』に？」

「質問は一つにしろ。俺は先生じゃないぞ」

城戸と剣崎がお互いの顔を見合わせる。

「じゃあ……『できそこないの世界』ってなんだ？」

ダークローチやミラーモンスターなどという怪物が蠢き合うような世界が存在しているのだろうか？剣崎はそのことが一番気になってい

るようだ。

「『できそこないの世界』は、すべてが無に帰るはずだった世界だ。ここ、試験に出るぞ。」

「無に帰るはずだった？……って試験は関係ないだろ！？」

龍騎がつつこむ、がコートの男はスルーして語り出した。

「無に帰るはずだったことになっているのは、過去が不安定になって未来であるこの世界が揺らいでいるせいだ。」

強い風が吹くたびに瓦礫の平原を砂が走り抜けていく……。

「本当は人も、怪物も、街も、時間さえもすべてがなかったことになるはずだったってことさ。まあ、平衡世界の一つの終末を迎えた姿だと思ってくれたらいい。」

「どうということなんだよ？」

「今のこの世界の過去が変わりつつあるってことだ。変わろうとしているせいで『できそこない』になった。……最悪なことに、他の世界もこのまま飲まれればこの世界に……。」

最後の方は呟くように男は語る。

「はあ？」

「よくわからないな……」

首をかしげる二人

確かにこの世界が異常なことは十分に分かったが、過去が変わっているとか、終末を迎えるはずだったとか信じがたい事が多すぎる。

「まあ、この世界のことはとりあえず忘れる」

「忘れるって言うてもなあ……」

「この世界から出る方法はないのか？」

「ある」

「どうすればいいんだ？」

「だが、お前たちの世界には通じてないかもしれないぞ？それでもいいか？」

「……マシな世界だったらいいけど」

城戸がいった。

「そうか。」

「じゃあ、あばよ」

男がポケットから出した手を上に掲げると男の背後に灰色のオーロラが現れる。

「え!?!」

「ウェイ!?!」

次の瞬間、オーロラは彼を通り抜けると二人を飲み込んでしまった。暗闇に視界が奪われ、急に重力に引っ張られる。どうやら、落下しているらしい。

「ドラグレッダア

!?!?!?!」

城戸は闇に向かって叫ぶ、それに答えるように雄々しい鳴き声が微かに聞こえる。

それに気のせいか、遙か下方に明かりが見える。  
星のように輝く明かり 街の光だ。

そして彼らは、夜の街に落ちていった。

~~~~~

1 2月24日 23:44 某所

陽がすっかり落ちた街は、ネオンライトや電飾、電灯の光で輝いている。

しかし、ここは古びた電灯ぐらいしかない。
バイクでそんな人気のない道を走っていく男がいた。

前方の信号が赤になるのをみて横断歩道の手前で停止する。
人気がないとはいえ交通法は守らなければいけない。

「・・・・・・・・・・」

信号を待っているそんな律儀な彼を見ている者がいるなど・・・・知る由もなかった・・・。

~~~~~

12月24日 23:48 東京都内廃ビル

「死ぬかと思った・・・・。」

「一真、大丈夫か？」

「あ、ああ・・・・。一時はどうなるかと・・・・。」

ドラグレッダーが来ず、為す術が無くただ落ちていく龍騎こと城戸を助けたのは、再びブレイドに変身した剣崎だった。

ブレイドと言っても金色の翼を持つ、ブレイドジャックフォームだ。  
「それにしてもアイツなんだったんだよ！いきなり、空に放り出すとか下手したら危ないじゃねあか！」

「・・・・・・・・ここはどこなんだろうな？」

変身をすでに解いた二人は、不時着した場所である廃ビルの屋上から遠い街の明かりを眺める。

街の明かりの中に東京のシンボルでもある東京タワーも確認することができた。どうやら、東京にいることは把握できたのだが……。

「俺のいた世界に似ているけど……」

「俺のいた世界も似ている」

本当に自分の世界であるかわからないのである。

「そういえば、俺と一真って別世界の人間？」

「そうなのかもしれない。俺は龍騎なんて知らなかったし、そんなカードシステムもBOARDにない」

「BOARD？」

「ライダーシステムを開発した研究所だ」

「そうか……。」

「よくてどっちかの世界、悪くて全く別の世界か……」

「まあ、さっきよりはかなりマシだな」

「そうだな」

「で、思ったんだけどさ」

「なんだ？」

「これからどうする？夜だし、知らない場所だし」

「え？」

「家に帰れないよな？」

「あ……。」

最も大切なことを忘れていたことを思い出した剣崎と城戸であった。

「ここ!?!」

考えた末、彼らはホテルに泊まれるほどの金もないため、不時着した廃ビルで一夜を過ごすことになってしまった。

しかも、かつてはマンションだったであろうビルの全ての部屋は、長年で溜まった土埃やむき出しになった鉄骨の錆で汚れている。窓に張られていたビニールシートを床に引くことで少しはマシになったのだが……。

「それしかないだろ。俺達ろくにお金を持ってないんだからな。」

「それは、そうだけど……。こんなじゃ寝れないかもなあ……」

マシになったといってもビニールシート一枚の上で寝ることには変わりない。ゴムの塊のような廃材を枕にして城戸が愚痴っている。

「しょうがないだろ……。?」

「……………」

「真司?」

「……………」

その間、わずか数秒で城戸はすでに寝息を立てて眠っていたのである……。

「イズノマニネダンディスカ!?!」

剣崎の呂律の回っていない声が更けていく夜の廃ビルに響くだけであつた。



~~~~~

12月25日 00:30

すっかり人が寝静まったであろう時間に街を駆ける影が二つ・・・。

一つは、バイクを駆る人型

もう一つは、鳥のような翼を持つ異形

地を駆ける異形の姿が街頭の明かりに映し出される。

その異形は、雄々しいオオカミの顔を持ち、その灰色の体に漆黒のトーガを纏っている。どこぞの神話に出てきそうな姿であるが、実際その異形の存在は神の使徒である。

それを追う人型も人間ならぬ者である。

「アギト・・・！」

バイクに勝るスピードで走るウルフロードの口が言葉を紡ぐ。アギトとはウルフロードを追う、人ならぬ者のことであろうか？それは、何を意味するのであるうか？

~~~~~

12月25日 00:38 東京都内廃ビル

「・・・！」

精神的に疲れてしまった剣崎は、最悪の環境で眠ることもできずに城戸の寝言を聞いていた。

が、突然彼の何かが戦いの気配を察知した。どうやら感じる力のぶつかり合いは、このビルの上からだ。

「・・・」

異常を感じた剣崎は寝ている城戸を起こすかどうか迷ったが、こちらに力が向く様子がないのでいつでも変身できるように構えて様子を窺っていたのだが・・・。

「・・・・・・・・？」

激しいぶつかり合いと共に感じていた戦いの気配が消え失せてしまったのだ……。もう、異常な力も感じなくなった。

「（アンデットでもないが・・・・・・・・）」

一体なんだったのだろうと疑問に思った剣崎だが、考え込んでいるうちに眠ってしまったのであった。

疲れ果てた彼らが起きるのは、いつになるのだろうか？

~~~~~

12月25日 09:25 東京都内

とあるビルに朝から警察のパトカーが数台止まっている。何か事件があったようだが……。

「で、仏さんは今日の零時二十四分から連絡が取れなくなった訳だ。」

「丁度死亡推定時刻になりますね」

「まあ、最後の空メールが仏さんの友人の携帯に入っていただけ。なんだがなあ、氷川？」

「犯人がそのようなことをするのは考えられませんよ」

「そうかあ？」

「なぜなら……」

「アンノウンの仕業だ」

「って言いたいんだろ？」

「……そうです」

「ま、仏さん見たときからわかってたんだけどな」

「あのような状態ですからね……」

「最近、アンノウン絡みばかりだなあ。駆除するのはいいけども、これじゃあ検挙率が上がらんな、なんてな」

「……」

「アンノウンを倒す仕事もしているお前さんに言うのは野暮だったかな？」

「そんなことないですよ、河野さん」

彼らがこの現場に出向いたのは通報があったからだ。

隣のビルの住人が第一発見者であり、ごみ出しに出たとき隣の屋上をふと見ると……ということだ。

発見された死体はありえない状態だった。鑑識の判断では、到底人間には不可能な犯罪　不可能犯罪とされた。

神の使徒

アギト

不可能犯罪

これらの事は、この世界^{まじ}ではよくあることだ。

第九話 「重・力・落・下」(後書き)

剣崎「なんか・・・今回、場面転換が激しくないか？」

城戸「ああ、なんでもあまりにも短かったからブレイドサイドの次話の一部を移植したら、こんなことになってしまったそうだけ」

剣崎「おいおい・・・、もう少しマシにできなかったのか？」

城戸「投稿の数時間前まで頑張って編集してたらしい」

剣崎「執筆は計画的にな！」

~~~~~

士「で、俺が作者の代わりに次回予告をするってことか。大体わかった」

士「次回予告、第十話『Cross parallel world  
d・・・』」

「おい、ナツミカン。俺のカメラ知らないか？」

「なんか、うまく言葉にできません・・・」

「ココは危険だ！一般人がなぜここにいる!？」

「ナマコは、海に帰さねえとな」

士「世界の破壊者ディケイド・・・いくつもの世界を巡り、その瞳は何を見る？」

次回も楽しみにしておけ！」

第十話 「Cross parallel world・・・」(前書き)

士「久しぶりの登場だな・・・。しかし、ディケイドとしか出てきてない・・・。」

夏海「最後にでたのって・・・第六話でしたね。しかも、声のみで・・・。」

ユウスケ「どうせ、俺、空気だし・・・Orz」

士「どんまい・・・。」



## 第十話 「Cross parallel world・・・」

ディケイドがデンライナーに現れるより遥かに時間は遡る。

9月24日 15:04 光写真館

「おい、ナツミカン。俺のカメラ知らないか？」

「え？士君のカメラ？見てませんけど・・・、この部屋にはないですよ」

暖かい日差しが差し込む部屋は、箱がたくさん置いてある。その真ん中で夏海は、何やら物を詰め込んでいるみたいだが・・・。

「お前、その箱の中とかにないだろうな？」

「そんなことないですよ・・・って！勝手に箱の中身を見ないでください！」

夏海の前に置かれている箱を覗き込もうとした士だが、あえなく押し返されてしまった。

「・・・まあ、無くて困らないがな。」

箱の中身が気になったがそれ以上の詮索はやめ、ため息とともに呟く士。

「でも、大切なものでしょ？探さないで」

「めんどくさい」

「そんなこと言わずに、外に探しにいったらどうですか？落としてきたのかもしれないよ？」

「そんなことはない・・・と思う」

「ないと思っていたら案外あるかもしれないよ」

「そんなことないだろ」

「土君のカメラが外に落ちているに賭けます！」

「じゃあ、俺は中に落ちているに賭けるとするか？」

「それじゃあ・・・勝った方は、今日のおやつを二人分食べられることにしましょう！」

「はあ？ナツミカン、お前・・・それが目当てだろ？」

「そんなことありませんよ！」

「ケーキ二人分も食べたら、お前太るだろ」

「太るって・・・、そんなことはありません！！」

「まあ、賭けに勝つのは俺だな」

「むゝ！」

夏海が土に『笑いのツボ』を打ち込んでやろうかと思った矢先、ユウスケの元気な声が玄関から聞こえてきた。

「土、夏海ちゃん！俺、なんか凄いもの拾ってきちゃったよ」

「そんなことよりも、ユウスケは外で土君のカメラ見ませんでしたか？」

「・・・どうせ、どうせ俺なんて・・・空気なんだOrz」

「スルーされただけで落ち込むな！今のは空気と関係ねえだろ！」

「土君のカメラ知りませんか？」

「土のカメラ・・・？」

「うーんと何事か考えるユウスケだが、何も思い当たるものは見えないようである。そんな様子を見て、土がため息をつく。

「いい・・・、そのうち出てくるだろ」

「絶対、外に落ちているはず！」

「そういえば！夏海ちゃんにスルーされて言いそびれてたけど、外で変なものを拾ったんだよ」

「変なもの？土君のカメラじゃなくて？」

「俺のカメラのことは置いておけよ。それで、なんだ？」

ユウスケがズボンのポケットから幾何学模様の入った何かをテーブルの上に置いた。見慣れないものに士も夏海もそれに見とれる。

「これは……、なんでしょうか？」

「……」

士がそれを持ち上げて眺める、黒いボディに青い幾何学模様……今の時代とはかけ離れたものを感じるそんなものだった。

「このスロット？ みたいなのが気になりますね」

「何かはめるんじゃないかな」

「そうだろうな。まあ、これは俺が預かっておく」

何を思ったか、士がそれを持って突然部屋を出て行ってしまったではないか。

「ちよつと、士君！」

「出かけてくる」

「士の奴、どうしたんだろね？」

「……士君、なんか変です。」

「え？ どこが？」

「なんか、うまく言葉にできません……」

先ほどまでは打って変わって心配そうな表情を夏海を不思議そうにユウスケは見ていた。

~~~~~

知らない街をどこに行くあてもなくマシンディケイダーを走らせる士

この世界のことが頭から離れない

実は、部屋のタペストリーが変わっていたのだ。

夏海もユウスケも気が付いていなかったが・・・それは、赤・黄・緑の三枚のコインが描かれているだけである。

すなわち、無限大を超える

「カメラがなくなったのはなぜだ・・・？」

身体を打つ風に眩きが溶けていく。そんな疑問を抱きつつ、しばらく午後の穏やかな日差しに包まれた街を駆け抜けていると何やら騒がしい、耳障りなサイレンと銃声が聞こえてきた。

「まあ、気にしていてもしょうがない・・・か。さっそく、俺の出番のようだな。」

バイクを近くに止めると騒ぎの方へと歩き出す。ビル街の店が派手に壊されているのを横目に見つつ、制止する警官の声を耳に入れずにバリケードを超えた。

「ココは危険だ！一般人がなぜここにいる！？」

警官群れの中にいる刑事らしい男が土に怒鳴るが警官たちがそれに気を取られ攻撃が緩んだせいか騒ぎの元凶が暴れ出す。土の視界に入った光景は、あまりにも非現実的な
虹色に輝く巨大なナマコがその巨体で辺りを無差別に破壊している光景だった。

『ギユウウウウ』

「生きのいいナマコ・・・だな」

ナマコが破壊したコンクリートの破片が警官たちを襲う。さながら、コンクリートの雨だ。

「ぎゃあ!？」

「うわああああ!」

「ひるむな! 撃て!」

ひるんでまとまってしまっている警官たちは、まさに烏合の衆。巨大なナマコの怪物に対して拳銃で応戦するのみである。一発で人を死に至らしめるそれも怪物の前ではあまりにも無力であるのに・・・。

「ナマコは、海に帰さねえとな」

鈍いながら重い一撃でコンクリートの雨を降らせるナマコを見据えて、一枚のカードを手に掲げ

「変身!」

『K a m e n R i d e D E C A D E』

何枚もの灰色の残像が現れたかと思うとそれら全てがが土に重る。

そして、腰に装着していたベルトから黒い板状のものが飛出したかと思うと勢いよく頭部に突き刺さり マゼンダを基調とした

仮面の戦士の姿がそこに現れた。それこそ仮面ライダー、ディケイドである。

「水には電気が効果抜群だな!」

『K a m e n R i d e B L A D E』

腰のライドブッカーから一枚のカードを取り出すとバックルに装填

したかと思えば、青を基調とした剣士の姿になった。

世界の破壊者ディケイド……いくつもの世界を巡り、その瞳は何を見る？

・ Continue 『Imagination RE:OOO』……

第十話 「Cross parallel world・・・」(後書き)

士「おい！なんだ、この短さはっ!？」

夏海「最後の一文も気になりますね・・・。どういう意味なんですよっ?」

士「ん?カンペに・・・・・・・・・・」

士「大体わかった」

夏海「カンペになんて書いてあったんですか?」

士「今回の話は、関連作品の紹介のための話だったようだ」

夏海「関連作品ですか?じゃあ、『Imagination RE:OOO』っていうのは、その題名ってことですね」

士「そういうことだ。スピンオフと言ってもいいが、本編と関わってくるのは少しだそうだな」

夏海「じゃあ、読まなくてもいいんですか?」

士「いや、読んでくれた方が本編を少し楽しめるようになってる」

夏海「どういう意味ですか?」

士「話が進めばわかるさ」

夏海「更新速度はどうなんですか?」

士「二週間に一回できたらいいところだな」

夏海「えーっ!?遅すぎませんか?」

士「そもそも、そんなに話数は無い話にするようだから。問題ないだろ」

夏海「はぁ・・・」

士「っという訳で、通りすがりの仮面ライダーが活躍する『Imagination RE:OOO』、是非読んでくれ。」

夏海「ここで次回予告です！」

夏海「次回 第十一話『Mな病院／狙われる街』！」

「あれ？翔太郎君、どこ行くの？」

「仲がいいというか・・・」

「俺は、守ると決めた・・・誰かの夢を。それが俺の夢だ！！」

『是非、私も聞きたいものだ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・フィリップ！」

夏海「次回もお楽しみに！」

士「俺のちゃんとした出番はいつなんだ・・・？」

第十一話 「Mな病院／狙われる街」(前書き)

不可解な失踪事件の真相を求める風都の私立探偵、左翔太郎は12月24日の一件から『奇跡の病院』と呼ばれている病院にたどり着く。絶賛居候中の火野映司、アंकもその調査を手伝う。同じく居候中の乾巧は都内で独りバイクを走らせていた。

あの24日から数日が経っていた。

第十一話 「Mな病院／狙われる街」

あれから数日『奇跡の病院』について探ってみたが、失踪者の松山清という男性がいるという確証を得た。人の良い映司に病院の老人たちと仲良くなって貰ったのだ。

それにしても、何かと映司は年寄りに好かれるな……。あの言葉に表せないような独特の雰囲気のせいかも知れない。後、アンクという奴は、事務所に居座ってしまっている。すごく迷惑だ……。まあ、それで映司が何かと協力的でいいんだけどな（主にアンクのせいで）。

最初は、彼らを失踪事件の線で疑っていたがどうも全く関係ないようだ。12月24日を境にして、『灰色のオーロラ』に関する目撃情報がなくなった。すっかり、その手の話はほとぼりが冷めていた。

なぜ、12月24日を境にして現れなくなったのか？

謎である。

~~~~~

「あれ？翔太郎君、一人？」

「そうだが、なんだ？」

「誰かいたら事務所の掃除手伝ってもらおうと思ったんだけどな。ま、いいか。」

翔太郎が再びタイプライターに向き合っていると三角巾にエプロン、やる気満々の亜樹子が鼻歌交じりに部屋を掃除し始める。はたきを振る音と鼻歌だけが部屋に響く。

「・・・・・・・・」

タイプライターを打とうとしていた翔太郎は、机の上に置かれたメモをふと、見る。無論、未だ解決しない失踪事件についてのメモだ。失踪者と確認された数人の名前などが書きならべてある。その隅っこに『樹田 哲郎』の名とユーと呼ばれた少女の電話番号・・・・・・・・。

あれからあの少女は、どうしたのだろうか？

12月24日に父親が消えたと突然やって来た。あれからもう数日たってしまった。

まだ、その少女は一人ぼつちなのだろうか・・・？寂しい思いをさせてるかもしれないと思うと自分が情けなく思う。いや、思うだけなら誰だってできる自分がしなければいけないのは、事件の真相を突き止めることだ。

「あれ？翔太郎君、どこ行くの？」

亜樹子は、席を立つと何も言わずに外へと出て行ったしまった翔太郎を不思議そうな顔で見送った。その理由が亜樹子が無くなった窓（バイクにより破壊された）を掃除しようとしたことに無言の圧力を感じたからなんては、言えない。

~~~~~

12月29日 13:54 風都小早川クリニック

「それにしても、病院というものは退屈なところだな・・・」

「そんなこと言わない。左さんの手伝いぐらいは、しないといけないんだからな？」

映司とアングの二人は、『小早川クリニック』の病室の一室にいた。

病室と言ってもホテルの一室のようにベットや風呂、洗面所、トイレ、冷蔵庫などが揃えられている。後、キッチンでもあれば十分生活ができそうだ。

「ふふふ、二人とも仲がいいのねえ」

ベットに腰かけている初老の女性が目を細めてる。彼女は、この病院で仲良くなつた患者の一人である。

「仲がいいというか・・・」

「腐れ縁だ、腐れ縁！」

「あら？ そうなの？ そういう風には見えないけどねえ」

言葉を濁す映司と吐き捨てるように言うアंकを交互に見ながら映司がサトミと呼んだ初老の女性はコロコロ笑う。それにつられて映司も笑う。

「ははは・・・。そういえば、サトミさんは今日は大丈夫なんですか？」

サトミは今日は大丈夫かしらねとつぶやく。彼女は癌が転移して助からないとされ、すぐる思いでこの病院にやって来た、と映司は聞いた。症状の悪化を防ぐために定期的に点滴をしているため、副作用で体調を崩すこともあるらしい。

「最近はお天気がいいからかしら？」

「そうですね。パンツを干したらいい感じに乾きそうですね」

そんな風に話している二人にお構いなしに退屈ぎみなアंकは病室の冷蔵庫を開ける。中は、程よく冷えており水のペットボトルがいくつかとアイスの箱が入っているではないか。それを見逃さず、開けて満足そうに食べ始めた。

「いいもんあるじゃないか」

「おい、アंक。勝手に食べちゃダメだろ？」

「いいの、いいのよ。アंकちゃん、アイス好きなんでしょ？ 私は食べれないからいいのよ」

「ほら、ばあさんもいいつつてんだろ？」

「はぁ……でも、アイスは一日一本だからな？」

「ちっ……。」

「お前……全部食べるつもりだったのか」

「さあな」

「そういえば、松山さんだったかしら？探していた人って」

「はい」

「昨日の夜にね、トイレに起きたら看護師さんが松山さんって呼んでいる声が聞こえたの。」

「本当ですか！？」

「うーん、声しか聴いていないし……。あなたの探している松山さんじゃないかもしれないわよ……？」

難しい顔をするサトミだが映司はその情報だけでもかなり満足したようだ。

「サトミさん、点滴変えますね」

ノックの音が聞こえたと思えば、その手に薬液のパックを持った看護師が病室に入ってきた。キリがいいところで映司は席を立ち、看護師の邪魔にならないようにアイスを食べているアंकを回収する。

「あら、もうそんなに時間たってたのかしら？」

「じゃあ、俺達失礼します」

「また、おいでね」

映司達は病室を後にすると病院の休憩室にやって来た。

「やっとそれらしい情報が手に入ったな」

「うん。でも……一体どこに松山さんがいるんだろう？」

「こんなこもったところで声が聞こえるんなら、近くだろ？いつそ、手当たり次第に部屋を見ていけばいいじゃないか」

「それは、だめだ。いろんな患者さんがいるんだから、迷惑になるようなことはしたくない」

「……。」

「なんだよ、そんなうんざりした顔して？」

「なんでもない」

「ふーん。失踪した人がいるかもしれないこと左さんに伝ええないとな」

映司がカイザフォンを開く。病院でケータイはいけなと言われているが、ここの病院決まった場所のみならメールを送信するだけなら使用可能なのだ。その場所が休憩室という訳である。

「えーっと……よし！」

カイザフォンに何事か入力するとそれをカバンの中にしまう。どうやら、メールは無事送れたらしい。

「アंक、他の人にも話を聞いてみよう」

「はいはい」

失踪者がいる可能性が出てきたことでその周辺の患者や看護師たちに聞き込みをすること、数時間……。

「どうやら、いるみたいだな。失踪者が……だが、肝心の居場所がわからないと……」

「松山さんが呼ばれたところとか、運ばれていくところを見つたつて言う人は結構いたけど……」

再び休憩室まで戻ってきて、今までの得た情報を整理するアंकと映司。映司は腑に落ちないという顔で続ける。

「なぜか、肝心の看護師さんが知らないなんて……。おかしい」「確かにな。病人の世話している奴が誰一人知らないというのは、奴ら嘘ついているんじゃないのか？」

「そう考えるのが妥当だけど……。」

でも、なんで嘘をつく必要があるのか？

そんな疑問を抱えつつとりあえず、翔太郎と近くの会ったために二人は病院を出て行った。

~~~~~

12月29日 15:00 風都某所

「……なんでこんなことになんだよ」

乾巧は非常にうんざりしていた。

壊した窓の修理代のため、亜樹子にアルバイトを強制的に紹介され、その面接に向かっていたはずなんだが先ほどから何者からか襲撃を受けているのだ。襲撃と言ってもどこから棘のようなものが飛んでくるだけなのだが……。時々飛来してくる硬質な棘がアスファルトに弾かれる音とバイクの爆音しか聞いていない。要は、誘導されて人気のないところに来てしまったということだ。

「出てこい、いるんだろ!？」

「いやはや、さすが」

いい加減にイタチごっこに飽きた巧は、バイクをたまたま見つけた空き地に急停止させ、声を張り上げる。するといかにもサラリーマンですと言いたいようにスーツを着た男が目の前に現れた。

「俺になんの用だ」

「お分かりいただき、誠に恐縮です。簡単な要件であなたの乗っている、そのバイクをお譲り下だけないでしょうか。」

「断る」

「ご決断が早いですが……。それが命取りになりますよ?」

「っ!？」

『おや?運動神経がよろしいようで』



巧が身を翻して飛んできた何かを避けると金属音とともに足元に円錐形の棘が転がった。ここに来るまで散々追いかけてたあの飛来物でもある。

自分を誘導したかと思われる棘の持ち主も姿を現した。灰色の体に棘がたくさんつている、おそらく体の棘を飛ばしてきたのだろう。

「二人がかりか、バジン！！」

『Battle Mode』

巧が言うまでもなく、電子音とともにオートバジンが戦闘形態に変形し構えを取る。

「お前ら、一体なんなんだ！？」

巧の問いには答えずに、サボテンのオルフェノクと並んだサラリーマン風の男もオルフェノクに姿を変えた。こちらは、嘴を持っているが巨大な眼球に体中に鱗のような模様が入っており、まさに魚のような姿をしている。サボテンの方は、キヤクタスオルフェノク。

鳥魚の方は、パロットフィッシュオルフェノクとも呼べよう。

『我々は、オルフェノク。』

『人類の進化した姿。そして』

『

『『この街は我々の楽園となる』』

「何！？」

風都がオルフェノクの楽園になるとでも言うのだろうか？まさか・・・。

『そのためには駒が必要なのです』

『このバイク。いや、オートバジンもその一つ。』

彼らから見れば巧はただのあきらめの悪い一般人・・・。突然、キヤクタスオルフェノクの体から無数の棘が打ち出されるが、それをオートバジンが弾き返す。それでも弾きかれた棘のいくつかは巧を

襲う。

『あなたが物分かりの良い方ならば無駄な抵抗は止してください』  
「ぐっ……」

持っていたカバンからベルトを取り出し、装着し、素早くファイズ  
フォンをプッシュする。

『Standing By』

「変身！」

『Complete』

無機質な音声と共にベルトから真紅のフォトンストリームが駆け巡  
り、ギリシャ文字の「」を思わせる戦士 仮面ライダーフ  
アイズが現れる。

『何！？』

『ファイズ！？』

「……」

なぜか動揺する二人にファイズは無言で殴り掛かる。

『まさか、あなたも同種だとは……』

『ますます、分かりかねます。なぜ、我々に盾突くのか。』

「俺は、守ると決めた……誰かの夢を。それが俺の夢だ！！」  
バジンと共に二体のオルフェノクに挑む巧。

相手は棘やら粘液を飛ばすが、スピードはファイズの方が上のように  
だ。尽くファイズにかわされるかオートバジンにより弾き返される。  
癖である手首のスナップをしながら、接近戦が苦手そうなパロット  
フィッシュオルフェノクに狙いを定めたファイズはパロットフィッ  
シュオルフェノクに接近し、ストレートを見舞う。

「があ！」

今度は、吹き飛ばされたパロットフィッシュオルフェノクに目をと  
られていたキャクタスオルフェノクにファイズが襲い掛かる。

「ギャアッ！」

飛びかかる勢いで相手を組み伏せるがキャクタスオルフェノクが押

し返す。が

『Exceed Charge』

紅く巨大な円錐形のターゲットマークに囚われた。

『ひっ!』

キヤクタスオルフェノクの声に恐怖が滲む。

「……………」

それに向かって前方宙返りをしたファイズがマークに吸い込まれるように飛び込むと

『うわああああ!!』

蒼い炎をその体から吹き出しながらキヤクタスオルフェノクは断末魔とともに崩れていき、死に逝く彼の背後に現れるファイズ。

「くっ……。これがファイズギアの力なのか……。」

ファイズに吹き飛ばされたパロットフィッシュオルフェノクは、バジンの追撃を受け人間態に戻ってしまっている。そんな彼にファイズ　巧は問う。

「お前はどつする?」

「さすがに明らかに不利な状態で戦うほど愚かではありません。で

すが  
「

「!？」

不意を衝いて最後の力を絞ってか再びオルフェノク態になり、ファイズにしがみつく。

「そもそも、カイザの確保が第一です。ここでファイズギアが壊れても計画には支障がないでしょう・・・」

「くっ！まさか・・・！」

その刹那、空き地に爆音が響いた。

~~~~~

12月29日 15:18 風都公園

「左さん、こっちです。」

平日でもあり、人気のない公園。噴水の前で待っていた映司が翔太郎を呼ぶ。

「失踪者が居たって、どうだったか？」

「なんだかおかしいんですよ。患者の人たちは松山さんを知ってい

るって言っているんですけど、看護師さんや医者の人たちは全く知らないって言うんです」

「やっぱりな……。あの病院何か隠しているな。」

「何か隠している？」

「何を隠しているのか、まだ分からない。しかし、他の失踪者もいるかもしれない……」

「そういえば、探偵の左さんに聞くのもんですけど……。警察のひとたちはどうしているんですか？」

「それがな、あの失踪者についての捜査が打ち切りになったらしい。元から失踪扱いになった時点でほとんど打ち切り状態だったらしい」

「もしかして、あの病院が何かしたってことですか？」

「そうとしか考えられない。」

「……………」

「他にも病院の話聞かせてくれないか？」

『是非、私も聞きたいものだ』

頭上から声がしたかと思えば、二人の目の前に灰色の怪物が降り立った。二本の腕以外に背中から昆虫の腕が生えている。まるでムカデ セントピードオルフェノクといったところか。

「うわっ！」

「お前、オルフェノクか!？」

『ご最も』

腕を組み、動かないセントピードオルフェノクだが、背中に生えている腕が伸びはじめる。

「映司！来るぞ！」

「わかってるって、アंक！」

カバンからベルトを取り出し装着する。そして、カイザフォンに入力する。

『Standing By』

カイザフォンを持った腕を前方に突き出す。

「変身！」

掛け声とともにセットする。

『Complete』

無機質な音声と共にベルトから黄色に輝くフォトンストリームが駆け巡り、ギリシャ文字の「」を思わせる戦士 仮面ライダーカイザが現れる。

「フィリップ、変身だ」

翔太郎もジョーカーメモリを構えながらダブルドライバーを装着する。

『翔太郎、いいタイミングだよ。ケセランパセランって知ってるかい？ケセランパセランは、江戸時代以降の民間伝承上の謎の生物とされる物体である。外観は、タンポポの綿毛や兎の尻尾のようなフワフワした白い毛玉とさ』

「……フィリップ！」

相棒から返ってきた答えは、ケセランパセランに関する知識だった。「どうしたんですか、左さん!？」

不気味な動きで向かってくる腕をブレイガンで切り落しながら映司が問う。

「……変身できない（ほぼフィリップのせいだ）。」

『おやおや、風都の仮面ライダーが戦えないとは……』

「運がよかったな！」

「左さん、ここは俺に任せてください！」

「大丈夫なのか!？」

「大丈夫です!……多分!」

「多分かよ。とりあえず、フィリップのところへ行ってくる。それまで頑張ってくれ！」

「はい！」

翔太郎を行かせんと伸びてくる腕をブレイガンの一閃で切り払う。

『その自信がいつまでもつか見ものだな』

「俺、弱くはないですよ?」

『ふふふ・・・』

平日の公園にセントピードオルフェノクとカイザが対峙するのであった。

~~~~~

「たつく・・・。フィリップの奴、けせらんばせらん？何てものにはまりやがって・・・」

公園から走り出て、近道に路地を走っていた翔太郎。

「左翔太郎様ですか？」

「へ？」

そんな彼に錆びついた自転車に乗った、どこかレトロな郵便屋が声をかけてきたのであった・・・。





## 第十一話 「Mな病院／狙われる街」(後書き)

映司「アंकって、本当にアイス好きだよな」

アंक「あんなうまいもんはないな」

映司「好きって言うけど、どのくらい好きなのさ？」

アंक「俺は、アイスのためならなんだってする！」

映司「本当に？」

アंक「ただし！ハーゲ ダッツ10個が必要だ！」

映司「ハイ(コンビニの袋を置く音)」

アंक「しかし、今のお前の金では……………」

映司「ハイ(ハーゲン ツツを置く音)」

アंक「……………これは、なんですか？」

映司「ハ ゲンダッツ10個だけど」

アंक「……………(ナゼエダ!?)」

映司「さて、何をしてもらおうかな？」

アंक「……………g k b r」

巧「って、夢を見た。」

フィリップ「それはとても興味深いね」

翔太郎「夢オチかよ！」

巧「続きが気になるな」

フィリップ「確かに……………では、検索を始めよう」

巧「頼む」

翔太郎「夢の続きなんて検索できる訳が・・・」

フィリップ「夢の続き、閲覧できたよ」

巧「どうなんだ？」

翔太郎「マジかよ！」

フィリップ「乾巧の見た夢の続きは・・・」

映司「って、夢をみたんだ」

アंक「知るか！」

次回の平成ライダー大戦！?? 時空を超える男たちは・・・

「俺は、世界の破壊者だ。」

「「「へつくしゅんっ!!」「」」

「仮面ライダーの一匹、俺達で十分だよ！」

「俺が操縦する」

「お、俺もできるかな・・・？俺、クウガだし！」

「うーん、ユウスケは・・・無理じゃないですか？」

次回 第十二話「予感」お楽しみに！

## 第十二話 「予感」(前書き)

士「えー、初めに言っておく……。すみません……。Orz」

ユウスケ「ど、どうしたんだ、士！？土下座なんてお前らしくないじゃないか？」

士「いや、謝らなければいけないような気がして……。」

ユウスケ「おい、目が死んでるぞー？」

士「読んでいる人は少ないと思うが『Imagination RE:000』の更新が少し遅くなるんだぜ？二週間あったのに作者、何してたんだか……。」

夏海「本編、始まりまーす。」

## 第十二話 「予感」

「モモタロスがいるってことは、ここはデンライナーか。」  
「なんでおめえがここにいるんだ!？」

笑いが落ち着いたらしいデイケイド、彼から灰色の残像が広がったかと思うと煤けた黒いコートを着た茶髪の青年が現れた。  
そんな彼の顔を覗き込むようにしてみるモモタロス。表情の読めないイマジンである彼だが動作でかなり驚いていることが窺える。

「俺は好きでここに来たわけじゃあないぜ」

「じゃあ、なんでなの・・・？」

「さあな、写真館がデンライナーの車内に来ちまったからしょうがない。」

デイケイドなる青年が良太郎の問いに対して背後のドアを指さす。  
彼が飛び出してきたドアは半開きとなったままになっているのだが、その向こうの景色が変わっていた。

今まで誰もいない車両が見えていたが、それが古めかしい写真台が置かれた部屋が映り込んでいるではないか・・・。

「こ、ここは・・・？」

「うわ!なんだ!？」

向こう側からも驚く声が聞こえて来たかと思えば、かわいらしい女性と活発そうな青年が半開きのドアからおっかなびつくりといった感じで出てきた。

そんな二人に黒いコートの青年は声をかける。

「夏海、ユウスケ。ここが時の列車デンライナーだ」

「時の列車?」

「時の狭間を走る列車だ」

「?」

「まあ、時期にわかるだろ。」

「??」

ユウスケと呼ばれた青年はいまいちわかってないという様な顔をするがコートの青年もそれ以上言っても無駄とでもいうように笑う。  
なぜ、笑うか？

それは、本人がこの列車に乗ったことがあるからである。かつて、電王の世界を訪れたときにその時の事件で実態を無くしてしまったモモタロスとアリゲーターイマジンと戦ったことがあるのだが・・・。その時は、モモタロスは良太郎たちとはぐれてしまっていたためにユウスケに憑依していたのだ。イマジンは、人間に憑依する。憑依された人間は特別でない限り意識を失ってしまうのである。

しかも、その騒動の後にすべてを終えた士が騒動が起きる前の時間帯に帰ってきてしまったため、ユウスケと夏海はその騒動を知らないことになってしまっているのだ。

「というか、士君。服変わってませんか？」

「そういえば、そうだな。しかも汚れている・・・。」

「ちょっと！そんなに汚れているのに払ったらだめじゃないですか！」

「ちょっとぐらいいいじゃねえか、ナツミカン。」

着ている本人も今、気が付いたようでコートに付着している土埃を払おうとするが、ほこりが立つと夏海に止められてしまった。

「今日は、いろんなことが起きますねえ」

「なんか、にぎやかでいいですね」

そんな騒ぎを遠目に見るオーナーに新しい焼き飯を出すナオミ。新しい焼き飯に満円の笑みを浮かべる彼に彼女は問う。

「でも、なんでデイクイドが来たんでしょうか？」

「12月24日、のせいでしょうかね？」

「12月24日ですか」

「ユーもお父さんが・・・って、寝ちゃってる。」

「疲れちゃったんじゃないですか？毛布かけときますね。」

「どうも」

ユーもまた遠巻きにその騒ぎを見ていたのだが、いつの間にか座ったまま寝てしまっている。父親が居なくなってしまうたり、イマジンという現実的にありえないようなものと出会ったり、見知らぬ場所に来たりとすっかり精神的に疲れてしまったのだろう。

ナオミが彼女に毛布を掛けてくれるのをクリスは横で眺める。

「ん？見慣れない客がいるようだが？」

「ユーちゃんと彼女のイマジンのクリス、いなくなったお父さんを探しているんだって」

向こうの騒ぎの中心となっている仮面ライダーの青年がこちらに気が付いたようだ。列車の隅の席で寝ている少女とそれに付き添うように座っているイマジンのことをハナが説明するとクリスは青い瞳のピンク色をしたウサギのイマジンが騒ぎの輪の中に入ってくる。

「どうも、よろしくね、って言っても乗車している間だけだと思うけど……。」

「こちらこそ。その……なんか、カワイイですね。」

「そうでしょ？当然のことだけど女性にそう言ってもらえるのは、とてもうれしいね。」

「……。」

「なんだモモタロス？何か言いたげだな？」

近くでナオミ特製コーヒー（？）を飲んでいたモモタロスから何かしらの負のオーラを感じた土が問う。しかし、モモタロスはだんまりしている。が、コーヒーを持つ手が震えている。

「というか、なんで俺たちが知らないのに土はこのこと知ってるんだ？」

「お前……オレのこと覚えてないのかぁ！？」

「し、知らないけど……。」

「一緒に戦った仲だろ！？」

おとなしかったモモタロスがものすごい勢いで立ち上がり、ユウスケに迫る。見た目の迫力もあり引き気味のユウスケは士に問う。

「え！？士……？」

「そうだな。あの時はお前の尻にコイツの剣が刺さってすごい技を見せてくれたな。」

「お、俺に何があつたんだ……」

「そんなこと言うんじゃない！あれは……あれは……あれは……」

「まあ！そんなことやらかしてのね！？」

「ち、違うハナクそおんな！」

「問答無用！」

「ぎゃあああああ！！！」

言いよどむモモタロスに自分の過去に何があつたのか不安になるユウスケ。

ハナのごぶしを食らって再起不能となったモモタロス。そんな状態の彼をあえてスルーして会話は続く。

「そういえばデイクイドだったけ？君は一体何者なんだい？」

「俺は、世界の破壊者だ。」

「おい！それはないだろ、士！？」

「No kidding！？君は悪者ってことかい？」

「破壊って言っても、士君は世界を救ってきたんです。士君も初対面の人（？）にそんなこと言いたいけないでしょ。」

「とりあえず、悪者って訳じゃないんだよね。お嬢さん？」

「はい。」

「良ければ名前をしえてくれないかな？お嬢さんとか言うのも変だし。」

「私、光夏海って言います。」

「俺は、小野寺ユウスケ。」

「彼は、門矢士。士君です。」



「デイクイドってのは、俺が変身した姿だな。まあ、そんなことどうでもいいだろ。俺がここに来たってことは、何か起こっているんだろ？」

「うん。時間の乱れが生じているからいろいろ調べていたんだけど・・・」

「12月24日を起点にして異変が生じていたみたいなの。」

彼らに世界の異変についての経緯を良太郎とハナが話す。それを聞いた士は・・・

「大体わかった」

「ああいつて、士の奴わかってないんだよな。まあ、いつものことだけど・・・」

「はは・・・」

ユウスケのボヤキに失笑気味の良太郎。そんな彼らにお構いなしに士は話を続ける。

「時間だけでなく世界も何かしらの異変が起きているだろ？」

「あ、うん。」

「それほどの異変が起きた原因はわかったか？」

「それはまだ調査中で・・・」

「自然に起こることじゃないんですよね？」

「間違いなくね。良太郎君も頑張っているんだけど、手掛かりが全くないのよね・・・」

「手掛かりがないなら、これはどうだ？」

「良太郎君、これチケットよね!？」

「うん。間違いないよ。」

士がコートのポケットから取り出したのは一枚のカード。それを良太郎とハナに見せる。

二人ともかなり驚いているがそれが何であるかは、知っているようだ。

「確か、それは前の世界でもらったものでしたよね？」

「土、それは何なんだ？」

「これは、電王が時間を移動する際に使うチケット・・・いわば通行許可証みたいなものだ。これがないとデンライナーを操縦することができない。」

「行先は2008年12月24日・・・良太郎君、どうする？」

「うん。手掛かりはないし、この行先に行ってみよう。」

「僕達も一緒にその世界に行ってもいいかな？もしかしたら、ユーの父親がいるかもしれない・・・。」

「うん。僕も手伝える範囲で手伝うよ。」

「Thank you!」

「それにしても、どこのどいつだか知らないが暇な奴だな。世界をどうしよってんだか・・・。」

~~~~~

「~~~~へつくしゅんっ!!」「」

「何者かがオレ達の噂でもしているのでしょうかねえ？」

「さあ？そんなことより、次の目的地は？」

「お前知っているか？」

「いんや」

夜の闇に紛れて人ならざる者が数人で何事かもめている。

「お前、指令を聞いたんじゃないのか？」

「お、俺じゃあない！確か、お前じゃなかったか？」

「え？俺？違うつてば！」

「ええい！おんなじ姿だとややこしい！そこのお前、もう一度聞いてこい！」

「「「そんなこと言うなよ！」」」

「わかった、わかった。」

『次の目的地は、2008年の例の日だ。』

「誰だ！？」

リーダー格らしいもののメタい言葉で騒然となった場に別の姿をした異形が現れた。灰色のそれに彼らは警戒する。

『初めましてというべきかな、イマジン達よ。』

「そういうお前は、オルフェノク・・・だったか。」

「お前らのせいで大変だったんだぞ！」

『何の話だ？』

「・・・つけ、まあいいとするか。あのお方の命令だしな・・・。」

「次は2008年か。行くぞ、お前ら！」

「「「おう」「」」」

『私も行こうか？』

「仮面ライダーの一匹、俺達で十分だよ！」

『それは、よかった。私は別にやりたいことがあったからな。』

「じゃ、さつさと失せろ」

「それにしても、やっと暴れられるぜ！」

「まあ、今まで裏で細工するだけだったもんな。」

イマジンと呼ばれた彼らもまた、士たちと同じ目的地を目指しているようだ。そして、オルフェノクとのつながりがなぜあるのか？

2008年の世界、そこで何が始まるのであろうか。

~~~~~

## デンライナー車内

「デンライナーで行くことになるよ、電王……良太郎さんが運転するんですよね？」

「僕が変身して操縦するんだ。そうしないと目的の時間にたどり着けないよ。」

「え？じゃあ、今は……デンライナーの運転は、どうしているんだ？」

「無人で走っているんだよ。」

「へえ。」

「自動運転っていうことですね。なんか、すごいです。」

感心するユウスケと夏海の横で土がおもむろにベルトを装着し、バツクルにカードを入れ

「変身！」

『Kamenn Ride DECADE』

電子音と共に灰色の幻影が現れると士に向かつて収束、ベルトの左側に付属されているライドブッカーから黒い板のようなものが頭部にセツトされマゼンダの戦士      デイケイドが現れる。  
そんな彼に啞然とする全員に士は不敵に笑い（？）宣言する。

「俺が操縦する。」

「は？」

「え？」

「ほ？」

「ええ！？」

かくして、時を駆ける列車  
24日へ出発したのであった。

デンライナーは2008年12月

## 第十二話 「予感」(後書き)

映司「アルパカちゃんが大きくなったよ！」

巧「何の話だよ、おい!？」

映司「え? 『みんなで牧 物語』」

巧「お前、何はまってんだよ……。」

映司「こういうほのぼの系の育成ゲーム好きなんだよね。心が和むよ……。」

巧「はあ?」

映司「後、思ってたんだけどさ、仮面ライダーのほのぼの系育成ゲームってないかなあ。あったら俺、買いたい!」

巧「誰得ゲームだよ!？」

~~~~~

翔太郎「次回はなんだ、フィリップ?」

フィリップ「閲覧済みさ。次回は『番外編 その3』だ。」

翔太郎「番外編か!」

フィリップ「今度はどんな内容か、気になるねえ?」

翔太郎「『番外編 その3』お楽しみに!」

番外編 その3

「???「風吹く街!」

「???「風都のラジオスタジオから・・・」

「???「『さあ、お前の罪を数えろ・・・!』」

映司「こんにちは、って・・・出落ちじゃないですか!?!」

ダブル「いや、カンペに『翔太郎、出落ちってなんだい?』書いてあるぞ」

巧「とりあえず変身解け、收拾がつかなくなる」

ダブル「そう『キーワードは「出落ち」』だな。」

映司「フィリップ君の声が重なってすごいことになってる・・・。」

翔太郎「で、今回はなんだ?」

フィリップ「・・・。(検索中)」

映司「悩み相談です。」

巧「誰の?」

映司「俺からの相談、なんですけど・・・。」

翔太郎「ほう」

映司「アイスって言ったら、何味が好きですか?」

翔太郎「いきなり何の話だ」

映司「いや、アंकが今までのアイスが飽きた、って言うて・・・

新しいアイス買おうと思ったんですけど、何かおススメはありませんか?」

巧「アイスカ・・・俺は、抹茶。」

映司「抹茶?なんか渋い。」

翔太郎「なんか意外だな。」

巧「よく、言われるが・・・何が悪い。」

映司「イメージに合わないから、かな?」

巧「じゃあ、何だったらいいいんだよ」

映司「うーん・・・。」

翔太郎「そう言われると思いつかないな。」

巧「俺は何を言われようが抹茶だ。」

映司「左さんは？」

翔太郎「俺か……。俺はシンプルイズベストでバニラだな。」

映司「ハードボイルドなの？」

翔太郎「アイスの味とハードボイルドは関係ないだろ！？」

巧「ハードボイルドとバニラは合わないな。」

映司「うん」

巧「ハードボイルド目指すなら甘いもの食うな」

翔太郎「昔、好きだったただけだ！」

映司「本当ですか？」

巧「そう言いつつ、菓子とか食べるんだろ？」

フィリップ「翔太郎は、ハーフボイルドだから問題ないよ」

翔太郎「何これイジメ……。！？」

映司「フィリップ君は何が好き？」

フィリップ「好きな味ではないが……。おススメとしては、生姜アイスだね。」

翔太郎「しょ、生姜！？そんな味あるのか！？」

フィリップ「ああ、他にも山葵・胡麻・夏蜜柑・紅生姜・紫芋・八朔・鱈子・八つ橋などなど存在するよ。それにしても……。『出落ち』はなかなか興味深い……。」

翔太郎「まだ、引きずっているのかよ！？」

映司「胡麻とか夏蜜柑とかならわかるけど……。山葵とか需要あるのかな？」

フィリップ「物珍しいから観光客に人気があり、なかなかおいしいらしい。」

映司「そういう珍しいものもいいかも……。」

巧「でも、抹茶と区別が付きにくそうだな。」

映司「あー、アंकに抹茶味って言って山葵味食べさせたら、面白いリアクションしてくれるかな？」

以下映司の想像

「アンク、新しいアイス買ってきたよ。」

「なんだ、抹茶味か？」

「うん」

「まあ、いい。さっそく食べるか・・・。」

「・・・。」

「ウウバア!？」

「・・・。(笑)」

「な、なんだこのアイスは!？」

想像終了

映司「って、感じかなあ・・・。」

翔太郎「いろんな意味で、やめい」

巧「鶏冠頭が不憫に思えてきた」

番外編 その3（後書き）

真司「次回予告は、俺がさせてもらっぜ！」

真司「次回 第十三話『破りたくないY／疾走するライダーたち』！」

「ここで一つ非現実な仮説が立つ・・・。」

『映司はどうした！？連絡が取れない！』

『オルフェノクでないお前は なんだ？』

「とつくの昔に俺は死んだ」

真司「次回もお楽しみに！」
一真「俺・・・Orz」

第十三話 「破りたくないY／疾走するライダーたち」（前書き）

映司「今から『平成ライダー対戦！？』始まるよー！」

アंक「やけに元気いいな」

映司「だって、今回の話、どう考えてもシリアスすぎるから」

アंक「まあ、そうだが・・・」

映司「前回からのあらすじ！」

映司「病院でとある失踪者の人が居る、という情報を得た俺とアंक。

でも、お医者さんや看護師さんたちがそれを隠しているように知らないと言う。

そして、左さんと会ってそのことについて詳しく話そうとしたら、オルフェノクが襲いかかってきた！

左さんが戻って来るまで戦うことになったんだけど・・・」

巧「俺、忘れてないか？」

第十三話 「破りたくないY／疾走するライダーたち」

12月29日 15:26 風都都内

路地を走っていた翔太郎を引き留めたのは、使い古された革製の力バンを肩から掛け、自転車に乗っているという一昔前の風貌の郵便屋であった。

「そ、そうだが・・・？」

「お届け物です」

驚きつつも翔太郎が答えると郵便屋は細長い封筒を差し出す。差し出されたからには、届け物とはこの封筒のことのようだが・・・宛名もない真新しい状態である。が、そのことに気が付くほど気が回らなかった翔太郎は、すんなりと受け取ってしまう。

「では・・・」

翔太郎が受け取ると郵便屋は軽く頭を下げ、錆びついた音を出す自転車で行った。彼を見送る暇もなく再び走り出す翔太郎。上着のポケットに押し込むように入れた封筒の中身も気になるが、オルフェノクと一戦交えている映司の助太刀に行くのが優先だ。

しかし、彼はその封筒がどんなものであるか気が付いていないようだ。それが吉となるか、凶となるか・・・。

時間はそれほどかからずに鳴海探偵事務所にたどり着いた翔太郎。その扉を勢いよくあけると

「やあ、翔太郎。何か例の事件の手掛かりでも掴んだのかい？」

「・・・・・・・・」

「何か？」

フィリップがベッドに腰かけ翔太郎に訊いてくる、まるで何事もなかったかのように、あのケセランパセランに夢中であつた彼はどこに行ったのか……。

そんな光景に思わず脱力しかけた翔太郎だが扉の枠をつかみ、辛うじて体を支える。

「いや・・・・・・・・、何でもない。」

「そうかい、僕も集めた情報を整理して色々検索して見たけど……非常に興味深いことが分かったよ。」

気を取り直し、フィリップの前にやってきた翔太郎。そんな彼に向つてフィリップは一見何も書かれていない本のページを捲り、話し始めた。

「『小早川クリニック』と言う病院についてだけど、あの病院12月24日以前は全く別の病院だったようだ。」

「は？」

「しかし、今、病院に通っている患者が多数いる。出来たばかりの病院にしては、多すぎるほどにね……。」

「そんなことより……」

「聞いてくれ、翔太郎。今から話すのは大事なことなんだ。」
「・・・・・・・・」

唐突にあの病院が12月24日以前は存在しなかった、と話し始めたフィリップ。そんな彼の表情はいつになく真剣であり、翔太郎は話に耳を傾ける。

「ここで一つ非現実な仮説が立つ・・・。」

そう言うといリップは本のページをさらに捲り、話を続ける。

「もしも、12月24日を境に元々あったものがすり替わっていたら・・・。」

「でも、そんなことは・・・。」

「あくまでも仮説だよ、翔太郎。これが真実であると確定されてわけじゃない。」

「・・・。」

12月24日以前まで全く別の病院だった、と言う話は非現実的なことだ。第一、そんな話が本当なら24日以前の病院はどこに行ってしまったのであろうか。そんな本やゲームの中のような話なぞ馬鹿げている、と考えるのが妥当であるが・・・そんな病院今まで聞いたことがなく。最近、と言うより失踪事件の調査で初めて知ったのだ。

『奇跡の病院』とも言われているほどの病院の話を今まで一度も聞いたことがないのは、おかしい。

翔太郎は、風都のことをすべて知っている訳ではないが、この愛すべき街のことはそれなりに知っている。彼の持つ情報網も狭いものではない。また、フィリップもよほどのことがない限りそんな突飛な仮定を考えたりしない。

これは非現実でありながら現実的な仮定なのだ。

「後、『オルフェノク』の存在も気になる・・・最近になって突然姿を現した。」

「奴ら・・・例の病院と繋がっているかもしれない。」

「それは本当かい!？」

「ああ、間違いない。映司と合流してきた時に待ち伏せてやがった。」

「なるほど・・・、彼らと病院は無関係とは言えない・・・これは、再検索した方がよさそうだね。」

そっぴいながら頷いたフィリップは何も書かれていない本を数ページ捲ると本を閉じ、意識を『地球の本棚』に飛ばす。

『地球の本棚』に入ると本という形で整然と並べられている地球にあるすべての記憶が彼の目の前に現れる。この膨大な情報の中に彼の求めるものはあるのだろうか？

「キーワードは、『^{失踪者}Runaways』、『^{病院}Hospital』、『^{オルフェノク}Orphenog』・・・。」

翔太郎は、相棒が本棚に意識を飛ばしている間に先ほど渡された封筒をみようとそれを取り出そうとする。が、スタックフォンから着信音が流れ、断念する。何事かと電話に出た翔太郎の耳を大音量の何かの音と聞き覚えのある怒鳴り声が打った。

『おい！聞いているか!』

「どわ!? 電話で怒鳴るな!」

『そんなこと言ってる場合じゃないんだよ！奴ら・・・』

声の主は、バイト先に行っているはずの巧であるが、金属同士がぶつかり合う様な音が雑音のように聞こえてくる。尋常でない雰囲気
に気が付く翔太郎だが・・・。

「お、おい！今のは!？」

『音は気にするな!とにかく、この街の人間が危ない!』

「風都の人たちが!? ということだよ!？」

『映司はどうした!? 連絡が取れない!』

「風都公園でオルフェノクと戦って・・・って、おい！勝手に切るなよ！」

耳元で不快な断絶音がしたかと思うと電話が切れてしまったようだ。さきほどの巧の言葉が気になる翔太郎は何度も掛け直して見るが一向に繋がる気配はなく、時間だけが過ぎていく。

連絡が取れない以上は合流するしかない、が幸運にも巧は映司の元へ向かったと思われる。映司のところに向かえば助太刀もできれば、巧にも会うことができるのだ。

それにしても、巧は一体何を知ったのだろうか。

「くそっ、何がどうなってるんだ・・・！？」

丁度、検索が終了したのかフィリップが目を開く、が何か難しい顔をしている。様子でうかがえる限りでは、良い情報が手に入らなかったようだ。

しかし、翔太郎は何か少しでも情報が得られたのではないかと期待を抱き、問う。

「何かわかったか・・・？」

「ああ・・・。でも、結論を出すには彼らについて知らなければいけない。」

「彼らってオルフェノクのことか？」

「そうだ。場合によっては、この街で恐ろしいことが起きようとしているかもしれない」


~~~~~

12月29日 15:28 風都公園付近

翔太郎を行かせてから戦い続けている映司 カイザ。被害が出ないように人のいない場所へと移動した結果、戦いの場は地下の駐車場となっている。

戦況はカイザにとって良いものでなく、こちらは二本の腕しかないのに対し、相手は十数本の腕がある。しかも、十数本、すべてが本当の腕ではないらしく無限のように再生してくるのだ。

「映司！腕ばかり切り落としても奴は倒せないぞ！」

「わかってるって！」

本体が一つであつても再生可能な腕に阻まれては、攻撃はなかなか当たるものではない。カイザ 映司もこのことはよく分かっているのだが、オーズとして接近戦が得意なこともあり、剣術での戦いを強いられているのだ。

しかも、カイザフォンの使い方もそれほどわかっておらず、カイザの最大の技も出せないのが、相手の隙を窺いながらひたすら迫りくる腕を切り落としていたのだ。

「消えた!？」

近くにいたはずの相手が目を離れた隙にいらなくなっていることに驚くカイザ、慌ててあたりを見回すが柱や車に阻まれて視界が悪い。あたりを警戒しつつもブレイガンブレードモードを構える。

が、背後に物音を聞いたカイザが振り返ると頭上で火の粉が散ったのが同時だった。飛び散る火の粉と共にセントピードオルフェノクが地面に降り立つ。奇襲の失敗とカイザ以外の何者かからの攻撃に動揺したのか、隙を作った相手にカイザがブレイガンで切りかかり、数本の腕と共に袈裟切りする。

『む・・・!』

「サンキュー、アंक!」

「ったく・・・。お前に死なれちゃ困る。」

「わかってるって・・・、お前もまだ比奈ちゃんにお礼言っていないだろ? お前にお礼言わせなきゃいけないし、だから、俺まだ倒れるわけにいかないよ。」

セントピードオルフェノクから距離を取りカイザはアंकの横に並ぶ。先ほど、セントピードオルフェノクの奇襲を破ったのは、アंकの仕業だったようだ。右腕だけを本来の姿にしたアंकが愚痴を言うのを苦笑して返す映司。

「さっさと行け!」

「はいはい」

再び臨戦態勢になるカイザ、それに対してセントピードオルフェノ

クはブレイガンで袈裟切りにされたはずだが、まったくダメージを負っている様子がない。

そんな様子を見て、ブレイガンを構えつつ対峙する映司はこのまま力押しでいけばこちらが負けるのではないか、という考えが頭を過ぎった。しかし、翔太郎が戻ってくれば勝機はある……はず。今は、彼が戻るまで持ちこたえるしかない。

そんなカイザにセントピードオルフェノクが問いかけてきた。

『あれは、人間でないな？』

「そうだけど？」

『オルフェノク……という訳でなさそうだな。』

「お前らと一緒にすんな！」

「アंक！コンボで……って、今はオーズじゃなかったっけ……」

今の映司はカイザだ。オーズのようにその場に合わせた変幻自在な戦いは望めないのだ。

「だからあれだけ探せと言ってたんだ。無くしたお前が悪い。」

「わかってるって。絶対、見つけるから……！」

対峙していたセントピードオルフェノクが背後から昆虫の足のような腕がカイザに向かって襲いかかり、カイザがそれを切り落としていく……再びイタチごっこの様な戦いが始まった。

それにしても、あのオルフェノクの腕は無尽蔵に再生することができるのだろうか……。切り落とした腕は青い炎に包まれ、砂のように崩れている。ここに移動するまでの間にも砂がそこらに跡を残すようにやって来たのだ。

『不思議に思うのだが』

「何？」

『お前はそのベルトの意味を知っているか？』

「意味？そんなの知らないけどっ！」

『そうか』

お互い譲らず攻撃の手を緩めずに問答を繰り返す。少しでも気を抜けば隙が出来かねない状態だ。

『無知であることは、良いかもしれないが・・・如何せん、知ることも大切だろう』

『そのカイザの力を身に纏うことができるのは、オルフェノクだけだ』

「」

「映司っ！！！！」

『二度も同じ手は通じないぞ』

「ちいっ！」

その言葉を聞いた映司の動きが一瞬止まる。即ち、隙を生んだこととなる。アंकがそれをフォローすべく火の玉を打ち出すが避けられてしまう。

セントピードオルフェノクはカイザの腹部にストレートを食らわせ、締め上げる。万事休すだ。

「あぐっ・・・！？」

『そもそも、カイザはオルフェノクにしか使えないものだ。人間が使えばすぐさま死に至るはず・・・』

「そ、そういえば・・・オルフェノクって・・・なんなの・・・さ・

・・・？」

『オルフェノクは、人だった。人は一度死すことで新たな道を知る』

『それを知りえた者だけがオルフェノクとして再生する』

『お前はいつ死んだ？いつ、人間じゃなくなった？』

『いや、違う・・・お前は、なんだ？』

『俺・・・』

『オルフェノクでないお前は                      なんだ？』

『Exceed Charge』

そうセントピードオルフェノクが訊いた時だった。電子音と共に彼に紅く輝くポインターが突き刺さる。そして、聞いたことのある声

「はぁああああああっ！」

「ふん！」

紅いフォトンブラッドを輝かせ、黄色く大きな複眼をもつ仮面の戦士がセントピードオルフェノクに向って蹴り掛かるが、セントピードオルフェノクが背後から生える腕でそれを薙ぎ払う。

「並みのオルフェノクじゃない、な・・・。」

「た、巧くん!？」

カイザに似た仮面の戦士は、一回転すると地面に着地する。彼の登場に驚く映司だったが、さらにその声の主が24日に空から一緒(?)に落ちてきた巧と言う青年のものであることに気が付く。ゆっくりと立ち上がり、右手をスナップさせると構える巧。

『・・・ファイズか。それもまた同じ意味を持つ』

「何の話だ？」

『ファイズの戦士。お前と戦う理由はない。』

「俺は、やるきがあるんだが」

『では、ここは引こう。』

「いててて・・・。」

巧が変身するカイザに良く似た仮面ライダーをファイズと呼んだセントピードオルフェノクは、締め上げていたカイザを捨て、天井を這ってどこかへと行ってしまった。

それを追うことをせず、ファイズはベルトに収まっているファイズフォンを引き抜く。すると変身が解除され巧が現れる。

「おい、大丈夫か？」

「うん、助かったよ。」

「おい、オルフェノクが元は死んだ人間ってのは、本当か？」

映司も先ほど投げ出されたせい、強制的に変身が解ける。そんな映司に声を掛け、巧は映司を助け起こす。

そんな様子を見ていたアंकはセントピードオルフェノクが言った言葉に疑問を抱き、巧に問いかける。

「・・・ああ」

「そのベルトもオルフェノクしか使えないだろ。じゃあ、お前は・  
」

アंकの抱いた疑問とは、さきほどのオルフェノクの『それもまた同じ意味を持つ』という言葉だ。カイザと同じ意味を持つという事は、ファイズもオルフェノクしか変身できないという事になる。それは、乾巧という人間が『それ』であるということだが・・。

「とつくの昔に俺は死んだ」

暫しの沈黙の後に巧はそう、答えた。

「死んだ人間が生き返る・・そんな話本当にあるのか？」

「生き返る、か・・。オルフェノクになった人間は、その力に蝕まれて人間より早く死ぬ。死体も残らない。」

「残らない・・？」

「灰になっちまうのさ。こんな風に・・な」

当たりに散乱する灰色の砂を顔で指す巧だが、その表情は悲しげに見える。それは、いつか、自分もそうなる運命にあるからなのであるのか・・。

「それよりも奴ら、この街の人間を使徒再生させるかもしれない・  
」

「使徒再生？」

「生きている人間を無理やりオルフェノクにならせることだ。大体の人間が耐えられずに死ぬ。」

「・・・・・」

アंकと巧の話を聞きながら映司は、まともに見られなくなった世界を見ていた。くすんだものしか映さなくなったのは・・・いつからだっただろうか。

『お前はいつ死んだ？いつ、人間じゃなくなった？』

でも、あの日の決意に後悔したことはない・・・。

だから、ここで立ち止まる訳にはいかない。

助けを求められれば、助けなければいけない。

守ってほしいと言われれば、守ってあげなきゃいけない。

手を伸ばさなきゃ、死ぬほど後悔する。だから、それに手を届かせなくちゃいけない・・・。



それが俺の絶対破りたくない

俺自身への約束

「行こう、巧君」

「ああ」

「お前ら、どこ行くつもりだ？」

「・・・・・・」

「馬鹿か」

### 第十三話 「破りたくないYノ疾走するライダーたち」(後書き)

一真「さて、次話の次回予告は・・・って、ナンディスクカコレハッ!？」

真司「どうしたんだ？」

一真「次話が真っ新なんだよ!」

真司「本当だ」

一真「第十五話はほとんど出来てるってのに・・・ナゼエディスクカッ!？」

真司「うまいネタがないからじゃない？」

一真「せっかく次回予告できると思ったのに　っ!」

真司「あ、そっかいや一真したことなかったんだっけ」

一真「ウソダンドドコーン　!」

真司「次回『第十四話　AGIT』お楽しみに!」

## 第十四話 「AGIT」 (前書き)

真司「第九話より前回あった三つの出来事！

一つ！「できそこないの世界」で、謎の男と出会った剣崎と城戸

二つ！そいつに空から落とされ、どこかの世界にやって来た

三つ！俺達の知らないところで何か起こった

って、ところかな？」

## 第十四話 「AGIT」

12月25日 10:00 東京都内マンション前

今朝から調査をしている氷川の元に河野刑事がやって来た。ベテランの刑事と言うこともあり、現場ではてんてこ舞いのようであるまで鑑識の人と話し込んでいたようだ。

「被害者は、木下栗太郎、21歳・・・間違いないな？」

「はい。先ほど確認が取れました」

「で、血縁者はどうだ？」

「両親はすでに他界。妹にあたる女性のみです。」

「そうか。また、護衛をつけないとな・・・。」

遺体の状態から不可能犯罪と判断された場合、被害者の血縁者も保護することが義務づけられている。

そんなことを遠い目をしながらばやく河野刑事の元へ他の刑事がやって来た。

「河野さん、遺体のもう片方ですが」

「お、見つかったのか？」

「はい。目撃者と思われる男性2人に事情聴取しているとのことですよ。」

「「目撃者？」」「

河野刑事と氷川が驚いたように報告に来た刑事に問う。

それもそのはず、不可能犯罪には全くもって目撃者がいない。その

事件を起こす存在自体一般には知られておらず、アンノウンは都市伝説のような認識をされている。  
その理由として目撃者にもなる被害者は、ほぼ死亡となっている。  
もちろん、マスコミによる報道も規制されている。

その目撃者というのが・・・一真と真司であるのだ。彼らが廃ビルの一角にいたところを警察に発見され、任意同行という流れで今に至る。

「だから、俺達は何も知らない！」  
「じゃあ、なぜ零時ごろにあのビルにいたんだ？」

狭い部屋に声がよく響く。どうやら、取調室に目撃者と考えられる一真と真司、刑事が一人いるようだ。  
様子から考えるに容疑者というより、あくまでも証言を取るための参考人という扱いのようだが・・・。  
とにかく、刑事が何か見たかとか、何か知っているかとしつこく聞いてくるため、一真と真司はすっかり自分たちが何かとんでもないことに巻き込まれたのではないかと勘違いしていた。

実際、不可能犯罪に関わっていると言うことは、とんでもないことだが・・・。

「そ、それは・・・なあ、真司。」  
「え、えつと・・・。」

刑事に廃ビルにいた理由を聞かれ言葉に詰まる一真は真司にフォロ―を求めるが真司もうまい言葉が見つからない。

別世界から来て、宿にも止まれずに廃ビルで寝るしかなかった、ということなどできない上に、そもそも、適当なことを言っても開放してもらえるのかも雰囲気的に怪しい。

「そ・れ・に」

「ウエツ!？」

「どわっ!？」

そんな内心途方に暮れている詰みゲー状態の二人が言い淀んでいると刑事が机を叩き、二人にこう言った。

「とにかくお前達は、不法侵入だ!」

「ウソダンドコドーン!!」

「落ち着け、一真!!」

「ウエエツ!？」

廃ビル言えど断りもなしに入るのは、立派な違反なのだ。

その一言がマラソンや寝不足でオワタ式に近かった一真の精神に効いたのか叫びを上げ、それを真司が机の上に置いてあったコップの水をぶっかけて止めた。  
辺りに一真の顔に当たらなかった水が飛び散り小さな水たまりを作る。

「本当に俺たちは何も知らないってのに・・・」

正気(?)に戻った一真は顔面がビショビショのままうなだれた。  
正直言つて、これは運命と戦う以上に厳しい戦いではないだろうか、などと思つのであった。

そんな茶番のような彼らの態度に刑事もしびれを切らせたのか、す

ぐに戻るという残し部屋を出て行ってしまった。刑事が去ったことで少しは気が楽になったが、問題は全く解決していない。チャンスと言えば、チャンスであり、その隙に逃げ出すという選択肢もあるが、そんなことしたら事情聴取どころでない事態に発展しかけない。

このまま解放してもらえるのをおとなしく待つことしかできないのであろうか？

「それにしても、水をかけることはないだろ、真司・・・。」

「・・・。」

「真司？」

一真が顔にまだ残っている水を拭いながら真司に愚痴る、が水をかけた本人は何やら床にこぼれた水を真剣な面持ちで見ている。  
一真もその視線の先のものを見るがこぼれた水の水たまりが部屋の中をうつしてただけ、としか感じられない。

「いける！」

「・・・？」

突然、真司が目を輝かせて水たまりを指さす。何の変哲もない水たまりに何かあるのだろうか。

喜々とする真司に未だ状況が分からない一真があっけにとられていると、真司が服の中から何かを取り出す。

確か、真司が変身していた時にベルトにはめられていたものだったような・・・と一真が思い出す。しかし、それを使って今ここで何をしようというのだろうか？

真司は、デッキを取り出すとそれを光の反射によって部屋を映し出

している水たまりに向かって突き出す。すると、真司の腰にどこからともなくベルトが現れたではないか。

「変身！」

掛け声とともにデッキをベルトに入れると龍騎の幻影と真司がオーバールップし、仮面ライダー龍騎に真司は変身したのである。何をするつもりなのであろうか。

「……………」

「お前も」

「は？」

「いいから……………って、誰か来る……………!？」

それを訳もわからないまま見ていた一真だが龍騎が変身しろと急かしてきた。それよりも何がどうしてこうなったかを説明してほしい一真であったが、外の廊下に響く足音に気が付く。どうやらあの刑事が帰ってきたようだ。足音は、忙しくこちらへと向かってきている。

「……………早く！」

「へ、変身……………」

急かされるままベルトを装着し、オリハルコンを通り変身する。狭い部屋の中に仮面ライダーが二人突っ立っているというのは、なかなかシユールな光景である。

足音が近づいてくる中で真司が何をしたかという、水たまりに飛び込んだのである。



「よし！行くぞ！」

「ま、待てよ！」

無論、コップの中にあつた水がこぼれ、できた水たまりに飛び込める深さなどないはずであるが彼は飛び込んだのである。

驚いたブレイドだが何せ時間がないものだから思い切つて水たまりを踏みつけた、はずなのだが何もないとこに足が引き込まれる。そのまま水たまりの向こう側に引つ張られるようにして、彼は水たまりの中から飛び出した。

もう一度言う、水たまりの向こう側に引つ張られるようにして、彼は水たまりの中から飛び出した、のだ。

一瞬、一真は同じ場所にいるのではと錯覚する、が身の回りにあるものすべてが左右逆転していることに気が付く。  
窓から見えている建物の向きや部屋の扉の位置……すべてが鏡写しのようになっている。

「つしゃあ！脱・出・成・功！」

「ここは確か……できそこないのせかい……？」

ガッツポーズをして喜んでいる龍騎にブレイドが訊く。彼の記憶が正しければこの鏡写しの世界は、あの荒廃した世界に似ている。

しかし、あの『できそこないの世界』と違って、先ほどいた世界と全く変わらない。妙に静かなことを除けば異常は感じられないのだ。

「いや、ここはミラーワールド。鏡の向こうにあるもう一つの世界なんだ。」

「ミラーワールド？」

「ああ、現実世界の鏡写しみたいな世界。本来は、ミラーモンスターたちはこつちの世界で暮らしているんだ。」

「それにしても・・・静かだな。」

「まあ、人がいない世界だし・・・でも、ミラーモンスターは、いるかもしれないな。」

「は、腹が痛い・・・。」

ミラーモンスターの話をしているとあの蜘蛛型のミラーモンスターのことを思い出し、腹痛に襲われるブレイド。どうやら、彼の中であのことはトラウマになってしまったのだろう。

誰だって、右も左もわからない状態でこちらを食べようと襲ってくる者はかなりの恐怖を覚える。それが非現実的な存在でなくても、である。

「さっさとここからでようぜ。」

「思ったんだけど・・・ここにいたら安全(?)じゃないか?」

人を襲う怪物が居るかも知れないが、先ほどのように厄介ごとに巻き込まれないであろう世界、むしろここで活動した方がいいのではないかとブレイドが龍騎に提案する。

その問いに対して、龍騎が言いにくそうに答えた。

「あー・・・。言ってなかったけどさ。ミラーワールドは長居できないんだ。」

「ミラーモンスター?」

「いや、制限時間がくると消える。」

「え?」

「跡形もなく消えるんだよ。急げ!」

「じゃあ、あの世界は・・・?」

「よく分かんねえけど。たぶん、あの世界は特別だったこと」

この世の中、そう上手くはできていないようだ。一難去って、また一難。

とにかくいい出口を探そうと二人は行動を始める。

この先、どうなるのだろうかと不安になる一真であった。一方真司は、真司で一つ気になることがあった。ライドシューターが無かったのだ。

ここは、本当にミラーワールドなのであろうか？

~~~~~

12月25日 11:13 美杉家

昼の日差しが降り注ぐ中、一人の青年が美杉家の庭で畑仕事をしている。

庭と言ってもほとんど畑となっており、そこには様々な野菜が育てられている。どれも生き生きとしており、世話が行き届いていることが窺える。

その庭の主がその青年である。彼の名は、津上翔一、らしい……。

本人も自分の名を忘れているせいで唯一の持ち物である封筒に書かれていた名を自分の名として借りたのだ。

自分の名を忘れるということは尋常でないことである。そう、彼は記憶喪失……。しかし、楽しそうに畑仕事をしている彼からそんな様子は微塵にも感じられない。

畑仕事を終えた、翔一は家の中に帰る。

家のリビングには、テーブルに広げた新聞紙を呼んでいる少年とテレビを見ている少女がいた。

畑から帰ってきた翔一に気が付いた少年 美杉太一が新聞から顔を上げて翔一に尋ねる。

「なあなあ、翔一！今日のクリスマスパーティーさ。何がでるんだ？」

「うーん、考え中。」

「それじゃあ、ステーキがいい！分厚いの！」

「じゃあ、私はブッシュドノエルが食べたいなあ。」

「えー！俺はチョコレートケーキがいい」

「ブッシュドノエルもチョコだけど？」

「いや、俺チョコケーキ」

「翔一君は、どっちかいいの？」

「チョコケーキだよな、翔一！」

そんな会話を畑仕事に使っていた道具を片づけながら聞いていた翔一に少女 風谷真魚が訊く。

「俺は、ケーキ作ろうと思ってるんだけど」

「手作りのケーキね。それもいいかも……。」

「えーっ！！！！」

「お昼ご飯を作る前に材料揃えておきたいんだけど・・・どうしようかな？」

「私、買ってくるよ？」

「え？いいの？ありがとう、真魚ちゃん」

不満そうなたーを余所に今年のクリスマスケーキは、手作りに決定したようだ。真魚が買い出しに行ってくれるということで必要な材料をメモに書いて翔一が彼女に渡す。

それを受け取った彼女は、適当にカバンを選んで玄関へ向かう。

「お昼までに帰ってくるから！」

「いつてらしゃーい」

行きつけのスーパーで材料が全て揃い、問題もなく家に帰ろうと信号を待っていた真魚はカバンにふと目をやった。

「あれ？」

中にはバター、生クリームや飾りするアラザン、カラースプレーなどが入っているのだが、何か足りない・・・。急いで中を見てみるとケーキの飾りとして買ったチョコレートのサンタが居ない。

確かに買ったはずの肝心の飾りがないことに気が付き、焦る真魚。
どこかで落としてしまったのであるうか？

「落し物よ。」

これから引き返して探しに行こうか横断歩道の前で迷っている真魚に背後から声がかかった。いきなり声をかけられて驚く真魚だが、背後に立っている女性がチョコレートのサンタが入った袋をつまんで差し出していた。

「あ・・・、ありがとうございます。」

「かばんに穴が開いているから落としたのよ。」

真魚がそれを受け取ると女性が真魚のカバンを指さす。よく見るとカバンが少し裂けているではないか。出かける前に適当に選んだカバンがたまたま破けていたようだ。

それを指摘すると女性は、自分の掛けカバンからどこかのスーパーの袋を出して、真魚に差し出す。

「はい、これを中に敷けば大丈夫」

「あの・・・」

それを受け取り真魚がお礼を言おうと女性は踵を返してしまった。

「じゃ、気を付けて帰りなさい。」

女性は、長い髪を揺らしながら去って行った。

しばらくその後ろ姿を見ていた真魚だが彼女も信号を越えて家へと帰って行ったのであった。

~~~~~

12月25日 11:28 東京都警視庁

どこかの部屋から数人の話声が聞こえてくる。

「事情聴取していた男二人組が消えた？」

「少し目を離れたときに蒸発したかのように、らしい・・・」

「逃げ出しただけでは？」

「いや、それは絶対はない」

「証拠は？」

「通路にいた奴が証言している」

「しかし・・・」

「超能力者ならできるだろ」

「なるほど」

「・・・確かにその線が強い。その事件はアンノウンの仕業で間違いないと・・・」

「とにかく、上の指示を待つか。」

「指示によっては保護しなければいけないな。」

「場合によって・・・」

そして、声たちは遠ざかっていった。



第十四話 「AGIT」 (後書き)

次回 第十五話

「俺！参上！」

「うわああああああん！」

「契約は完了している、ってことが・・・。」

朝が来て、昼が過ぎ、夜が更ける・・・

時は、定められた掟のように廻る

「廻る時」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4088x/>

---

平成ライダー大戦！？～時空を超える男たち～

2012年1月14日17時51分発行